

岩田覚太郎の画集

日本画から木版画へ、その生涯の思い

岩田 穆 編著

まえがき

岩田覚太郎は愛知県半田市で高校教師として美術の教育をしながら、風景や動植物を優しい目と心で捉えて、自然な親しみ易い画風で表現した木版画家である。

その作品の題材として、故郷の山や海、古い公園や庭、日常的な花々や野菜などを取り上げている。30歳代半ばから木版画を学び始め、学生時代に学んだ日本画の感覚や技法も活かしつつ、自らが目指した庶民性と芸術性を持った木版画の世界を作り上げた。そして、版画では複数の作品が容易にできる特徴を活かして、多くの愛好者の手に版画作品を届けた。

今回、木版画のみでなく日本画、水彩画、スケッチなどの作品を網羅した画集を出版して、覚太郎の生涯を貫いた絵への思いを将来にも伝えたいと考えた。

本画集では、木版画を始めた頃の多色刷りの作品から、黒単色の風景の木版画、半抽象的な黒単色の風景や花などの木版画、鮮やかな多色の木版画へと進化した作品を、年代を追って掲載している。様々な挑戦の末に到達した多色の木版画は絵への思いが集大成されたものである。また、各時代の木版画の小品とともに蔵書票、年賀状なども掲載している。さらに、版画が創れなくなった晩年に描いた日本画調の水彩画も載せている。

次に、時代を遡って、東京美術学校の学生時代に、心血を注いで描いた花や人物の日本画を掲載している。当時、芸術家にとって最大の舞台であった帝展（帝国美術院展覧会）に出品した作品も含まれる。また、学生時代には国宝を含む古い大和絵の模写にも精力的に取り組んだ。細かい筆使いや微妙な色彩、さらに積もった汚れまで含めて実に忠実に再現している。多くに模写作品の中から、鳥獣戯画などの代表的なものを掲載した。

最後に、中学生の頃から描き続け、生涯大切に手元に置いていた100冊以上のスケッチブックから、一部の作品を掲載した。スケッチブックには、旅行した山河が多く描かれ、旅先で見たものを描き残したメモ、構図を練るための版画の下絵があり、珍しい自画像もあった。

覚太郎没後、約20年が経ち、多くの同僚や教え子も亡くなり、やや遅すぎた感もあるが、本画集をまとめた過程で、初めて見る日本画にも触れることができ、各時代にこんな風に思っていたのではないかと父の思いを絵を通して推察できたのは大きな喜びであった。

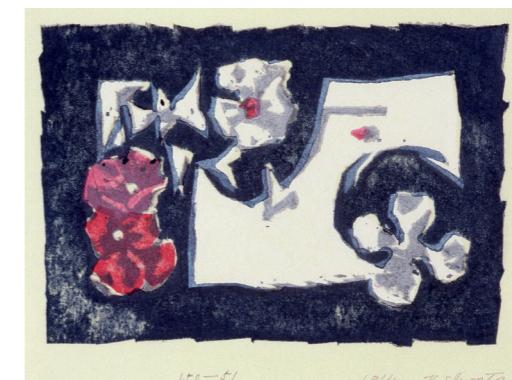
本画集をご覧いただき、覚太郎の生涯を通して90年以上燃やし続けた絵への思いと、題材にした動植物や自然に向き合った優しさを感じていただき、そして、覚太郎を知らない人にもそれを語り継いでいただければ幸いである。

本画集に掲載した木版画、その版木、大和絵の模写、スケッチブックなどは、現在、半田市立博物館に寄贈され、大切に保管されている。そして、定期的に公開展示されているので、直に見ることができる。

もくじ

第1章	生い立ちと絵への思い	4
第2章	初期の写実的な多色木版	8
第3章	風景の黒単色木版画	22
第4章	半抽象的な黒単色木版画	28
第5章	写実的静物の多色木版画	34
第6章	木版画の小品	62
第7章	晩年の日本画調の水彩画	75
第8章	学生時代の日本画と大和絵模写	80
第9章	スケッチ	90
作品索引		102
略歴		104

図版凡例



タイトル 制作年 種類 縦x横 (cm)

第1章 生い立ちと絵への思い

岩田覚太郎は1902年(明治35年)に、愛知県葉栗郡木曽川町で織物業を営む家の長男として生まれた。多数の使用人を雇う家ではあったが、美術とか芸術にはあまりなじまない商売人の家系であった。そのような家業を継ぐことが期待されていたが、小学校の頃から絵を描くことが大好きで、美術の道に進みたいと考えるようになった。旧制中学卒業後に一大決心して、1年の浪人時代を経て、1922年に東京美術学校(現在の東京藝術大学)の日本画科に入学した。当初は強く反対していた親も本人の希望を認めて、学資を援助してくれた。



東京美術学校時代

当時の東京美術学校の日本画科の教授陣には川合玉堂、小堀鞆音などがあり、同時期の学生には東山魁夷など、有名になった画家もいた。このような環境で学び一流の日本画家になることに、ある程度の自信を持っていました。しかし、覚太郎が美術学校を卒業する頃、不況により実家は事業に失敗して倒産した。この時、画家になることを認め、それを期待していた親は、資金援助ができなくなったことを謝ってくれたという。それで、一流画家として画壇に認められるには何かと金のかかる日本画家として生きる道を諦めた。この決断には、経済的な面とともに、自由な芸術とは距離のある、重苦しい日本画の世界に疑問を感じていたようである。

このようにして、覚太郎は1931年に愛知県半田市にある半田高等女学校の美術の教師として着任した。半田市は知多半島の真ん中の三河湾側にあり、江戸時代から醸造業が盛んで、江戸への廻船の港や倉庫があった。明るく暖かい知多の海や島々や、長閑な田畠もあり、とても気にいっていた土地でもあり、学生時代にはスケッチでよく訪れたことがあった。

高校で絵画や書道の教育を行う傍ら、芸術活動として何ができるか模索していた。幸いなことに1935年に愛知県の各地で木版画の講習会が盛んに開催されていたが、この講習会で、平塚運一、前川千帆という日本を代表する木版画家の指導を受けることができた。ここで、近代木版画を勉強するうちに、日本画と違って伝統や権威にこだわらない自由な近代版画の魅力に取り憑かれた。また、版画は一品でなく多数の作品を容易に作って配れるという庶民性にも惹かれたようである。



高校教師時代

美術で自分の世界を築いて存在を残すには何をすればよいかと、もやもやしていた思いを晴らして、明るい希望をもって木版画の世界に転向できたのであった。この人生の転機で、導いていただいた先輩方に深くに感謝していると聞かされた。学生の頃に日本画の世界で身につけた感性、知識を木版画にも活かして、制作活動を開始した。また、版画家であり、童話作者でもあった武井武雄にも師事し、氏の主催する「榛の会」に参加し、武井の類を見ない才能に圧倒されながらも、年賀状版画などにも取り組んだ。そして、版画を始めて10年程度で日本版画協会などに属し全国的な場に木版画を発表するようになった。

1961年には愛知県の版画家であった、佃政道、佐藤宏等に誘われて、「版画五人展」に參加した。そのメンバーは佐藤宏、佃政道、鈴木幹二、木下富雄と覚太郎であった。後に木下は佐藤暢男に交替している。この版画五人展は、年に一回、愛知県美術館に五人が個性的な作品を陳列した。この展覧会は23年間も続き、各人が年に10点の版画を陳列したので、作品は全部で230点に達した。覚太郎は版画五人展の仲間のお陰で版画制作を続けられたことに大変に感謝していた。高校教師時代の教頭職の時には、頭を悩まされることも多く、作品を揃えるのに大変苦労したであろう。絶えず新しい版画を追求し、作品を仕上げるための努力と苦労があったことは、筆者の子供の頃の記憶にも焼き付いている。

80歳の頃には「淡虹会」という絵の好きな人の集まりの先生役として、絵を通して、地域の方々との交流もあった。若い方々が来てくださり、絵の話などする中で覚太郎の方が力をもらっていたとも思える。そして、20世紀を生き抜き、1999年に静かに97歳の天寿を全うした。

「版画60年の回顧 岩田悪太郎展」(1989年開催)の回録に本人が書いた文章を引用する。

「版画との出会いと恩師への感謝について」

昭和10年の亀崎で開催された木版画の講習会の受講は私にとって実に運命的なものでした。それを契機として私は何のためらいも無く日本画から版画へとその道を踏み換えることになってしまったからです。その時の講師であった平塚運一先生、会主宰の大岩忠一両先生と、16年の半田講習会の講師の前川千帆先生は今も私の脳裏にはっきりと焼き付いています。

版画は同じものが同時に何枚も出来るという大きな特徴をもっています。そして版画が今日すっかり私達庶民のものになっているのは全くこの複数性のお陰であることを思いますと、ほんとうにこれほど有り難いものはありません。

「自分の版画の作風の変遷について」

振り返りますと私の作品には大体三期に分かれます。第一期(昭和12年-37年)は前半の多色、後半の黒の単色と変わってはいるが、ともに写実的であり、また輪郭線を多用している点で同一と思うもの。第二期(昭和38-49年)は第一期後半に続く黒の単色ながら幾分抽象がかったもの。第三期(昭和50年以降)は再び写実に戻り、色版だけを重ねた、余白の多い日本画基調のものとなっています。

「版画への思い」を地元報道誌のインタビューで述べている。

床の間にかけるような立派な絵はあまり気にいらない。美術や芸術は生活のなかから生まれてきたものだから生活から離れてはいけない。畑になっている立派なナスは家に持つて帰って食べるが、できの悪いナスは見向きもされない。それは気の毒になりますので、持つて帰つて描ければナスが喜ぶんではないかというような思いで、ゆがんだり、腐つたりした野菜や魚、そして海苔とか湯葉のような形が整っていないものも、拾ってきてスケッチして、版画にした。

小さな版画を沢山刷って飛行機から配ると子供達が一生懸命拾ってくれて、それが広告ビラではなく版画だと喜んでくれたら嬉しいなという気持ちで、大作でなくても小さなものでも、一つの作品として多くの人に届けたい。それができるのが版画の特質であると考えます。

絵で最も大事なのは構図です。何十枚も下絵を描いて構図が決まり、そこで一枚の絵が生まれる。感性のみでなくそのような努力があって初めて芸術が生まれると思います。



版画五人展のメンバーとの旅行



版画五人展会場にて家族、親族とともに

覚太郎とともに版画を志した方による寄稿からも、覚太郎の素顔を知ることができる。「版画60年の回顧 岩田覚太郎展」の図録に寄稿された佐藤宏様の「岩田先生の版画」と、豊田素子様に本書のために書きいただいた「語り尽くせないほどの思い出」を以下に掲載する。

「岩田先生の版画」

岩田覚太郎先生は、昭和2年に、東京美術学校日本画科を卒業された。油彩の方には、小磯良平、荻須高徳、猪熊弦一郎など、錚々たるメンバーが在学していたころである。

数年前に、この半田の博物館で、岩田先生が美校時代に精魂を傾けられた古画の模写を見る機会があった。その見事さはただただ敬服すばかりであったが、こういう辛抱強い緻密な勉強をなし遂げる人は、もういないのではないかと思われる。

岩田先生に版画の話を伺うとき、まず登場するのが、この地方の版画教育の先駆者、大岩忠一さんである。よほど敬愛されていたようで、お聞きしていて心温まる思いがする。

昭和3年ごろから、平塚運一氏による版画の講習会が亀崎小学校を振り出しに行われ、知多半島の版画教育は、全国でもきわだっていたようだ。当時、半田高女の教職にあった岩田先生もその一翼を担われたと承っている。

版画の作風としては、前川千帆氏の影響が大きかったようで、そのおだやかで気品のある画風を受け継いでおられるように思われる。

花や風景だけでなく、風さいのあがらぬ野菜や蒟蒻、海苔、湯葉などまでが、やさしく見つめられて版画に凝縮する。独特的色彩と呼応して、永く人々を魅了する。

今回の回顧展は、まさに60年に及ぶ先生の道程を知る上で、貴重な企画であると言えよう。

額縁に収まって飾られる作品ばかりではなく、年賀状、暑中見舞、蔵書票（エクス・リブリス）木口木版など、日常の暮らしに豊かさを届ける使者とも言えるような、珠玉の小品も含まれて出品なさる。鑑賞者を大いに楽しませてくれるのではないだろうか。

庭に石塔一つ置くのにも、先生はあきれるほど執拗に探される。やきものは絵つけしたものではなく窯変したものがお好き。花も大好き、欲しいとなると、天竺の果てまで追いかけてゆかれる。自分の感性を何よりも大切にされるこうした姿勢は、版画制作のプロセスにも共通したもので、作品にする前にたっぷり時間をかけられる。

居間の窓を一ぱいにあけて、薰風を頬に、一人悠然とシンフォニーを聴かれる。どの作曲家が好きかとたずねると、誰でもいいのです、好きな曲なら、という答えがかえってくる。

清楚そのものの夫人が他界されて、もう8年になる。今、この会場に座っておられたらと、しきりに思われてならない。

1989年 版画家 佐藤 宏（国画会会員、日本版画協会会員、水彩協会委員）

「語り尽くせないほどの思い出」

先生に初めてお会いしたのは1965年頃で、私は20歳前後でした。

その時すでにご高齢でしたが、年齢を感じさせないほどお気持ちは若く、初心者ばかりの木版画講座でも丁寧に熱意を持って指導して下さいましたので、私はとても親しみを感じて、小さな年賀状から木版画制作を始めました。

それ以降 97歳の長寿で静かに眼を閉じられる迄の長い年月に、より深く木版画のご指導を仰ぎ、日本画及びその他の多くの事を学ばせて頂いて、様々な思い出を残して頂きました。

当初 私は版画に限らず全ての知識が白紙状態でしたから、応対も不充分で恥ずかしく思いましたが、いつも優しく気を遣って下さって、京都・奈良等の日本美術、東京上野の美術展、その他重要な催し物がある時は、遠方まで出掛けて直接鑑賞する機会を何度も作ってお誘い下さいましたので、その度に恐縮しながらご一緒させて頂きました。

また、その都度、貴重な美術の講義の如く詳細な説明をして下さったり、興味深い逸話などもリラックスしてユーモアを交えながら聞かせて下さいましたので、私は全く知らなかった広い芸術の世界に目を見張り、いろいろと感動しながら楽しく有意義な時間を過ごした思い出が脳裏に焼き付いています。

そして、先生のご自宅では貴重なスケッチブックを惜しみなく開いて下さり、直に感じ取るように個人指導を受けましたが、充分に観察した上で描かれた迷いの無い写実の「線」と、濁りの無い素晴らしい「色合い」は実に美しくて、新しいスケッチを拝見する度に感動させられていきました。

でも、時間を要するのは作品に仕上げる為の構図の模索であり、新しい感覚で素材選びをすることも重要であると教えて頂き、このお言葉を現在も大切にしています。

更に、先生が何気なく話される一言もとても大切で、私にとってはいつも新鮮で興味深い内容でしたが、制作に関してはスケッチの重要性、新しい感性を育む姿勢、媚びない独創的な作品制作を心掛けることを指導して頂きました。

先生の制作意欲や新しい事への探求心は亡くなられる時まで変わることなく、今も観る人に感動を与え続けている多くの作品を制作されて、心豊かに人生を全うされた尊敬すべき岩田先生 !! 沢山の思い出をありがとうございました。

私の人生において、素晴らしい恩師にめぐり合うことが出来たことを大変に幸せに思っています。

私もあと少しの間、試行錯誤を繰り返しながら版画制作を続けたいと思っていますので、また時々夢でお会い出来れば、ぜひ適切なご指摘・アドバイスなどを頂きたいと願っています。

2020年12月 豊田 素子（国画会会員、サロン・プラン美術協会委員）

覚太郎が「版画60年の回顧 岩田覚太郎展」の図録の中で謝意を述べている方々を以下に示し、改めて感謝申しあげます。

榎原嘉鶴様、佐藤宏様、杉浦温子様、佐々木商博様、佃政道様、豊田素子様、中野繁子様、成田光二様、藤旗和佳子様、三野満彦様、森島徳衛様、山田光二様、山本二三子様、吉房鈴代様、立松博様、榎原道三様。

本画集に覚太郎の思い出を執筆いただいた豊田素子様に感謝いたします。

覚太郎の作品を管理をいただき、本書の編集にご協力いただいた覚太郎の長女の榎原茂様とその夫である精二様に感謝いたします。

本書に掲載した、版画や大和絵の模写の画像データを提供いただいた半田市立博物館の方々、特にお世話になりました学芸員の秋山紘胤様に感謝いたします。

覚太郎の学生時代の日本画の画像データを提供し、掲載を許可いただいた東京藝術大学の皆様に感謝いたします。

文献

1. 版画60年の回顧 岩田覚太郎展 半田市立博物館 1989年6月
2. 大和絵を今に 岩田覚太郎模写展 半田市立博物館 1990年6月
3. サロン 岩田覚太郎紹介記事 知多っ子 第11巻4号 No.64 1989年7月25日

第2章 初期の写実的な多色木版画

1937年～1942年（昭和12年～17年） 35歳～40歳

初期の木版画は、木版画講習会で指導を受けた版画家である平塚運一と前川千帆の作風と技法を学び取り取りながら、日本画の感覚や技法も加味して、自分の版画を実現するために、種々に模索しながら制作したものである。

風景版画では、好んで訪れた山や海の自然、公園や神社の庭とそれに溶け込んだ造形物を描いている。ここには学生時代に学んだ日本画の感覚が構図や色彩に活かされている。

代表作の「あずまや」（p.12）に見られるように、木版画の特徴的な彫刻刀の掘り出す明確な線と、版木の木目によるテクスチャーを融合させて、独特の世界を創りあげている。また、スケッチを繰り返すことによって洗練した構図と、単純化された線と、穏やかな色彩で構成されている。あまり大きくなく画寸ながら、昭和の前半を知る人には懐かしさを感じさせる作品となっている。

一方、静物版画では家庭にある野菜を題材としているが、写実的な表現で野菜の瑞々しさや匂いを感じさせる、力強く重厚な作品となっている。

1937年（昭和12年） 35歳



桃畠 1937 木版画 11.3 x 14.7



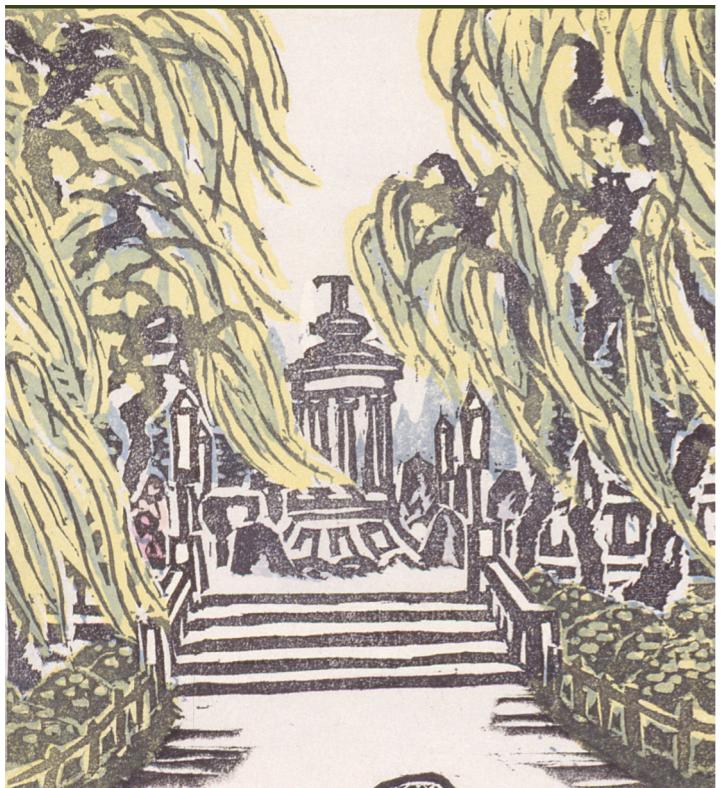
堀端 1937 木版画 12.8 x 17.3

1938年（昭和13年） 36歳

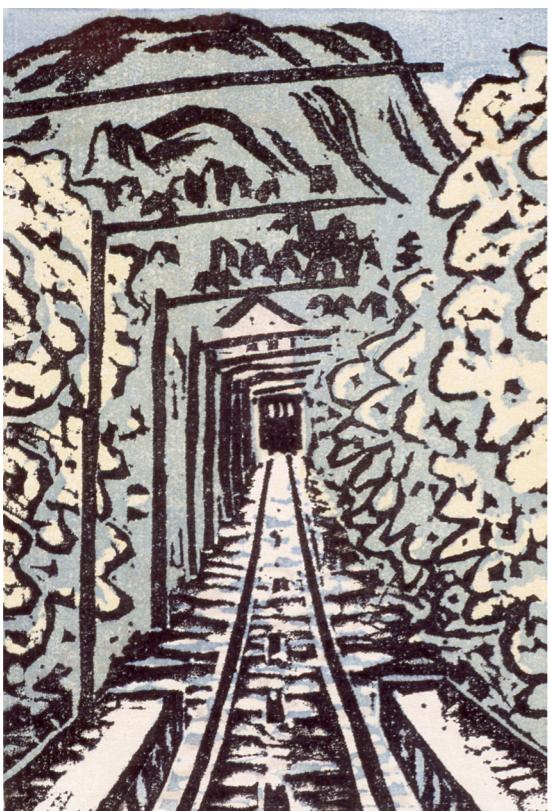


鴨群 1938 木版画 22.2 x 28.7

1938年(昭和13年) 36歳



噴水塔
1938
木版画
14.1 x 12.8



ケーブルカー
1938
木版画
15.4 x 10.5



加賀の山 1938 木版画 10.7 x 17.5



山すその秋 1938 木版画 12.1 x 17.8

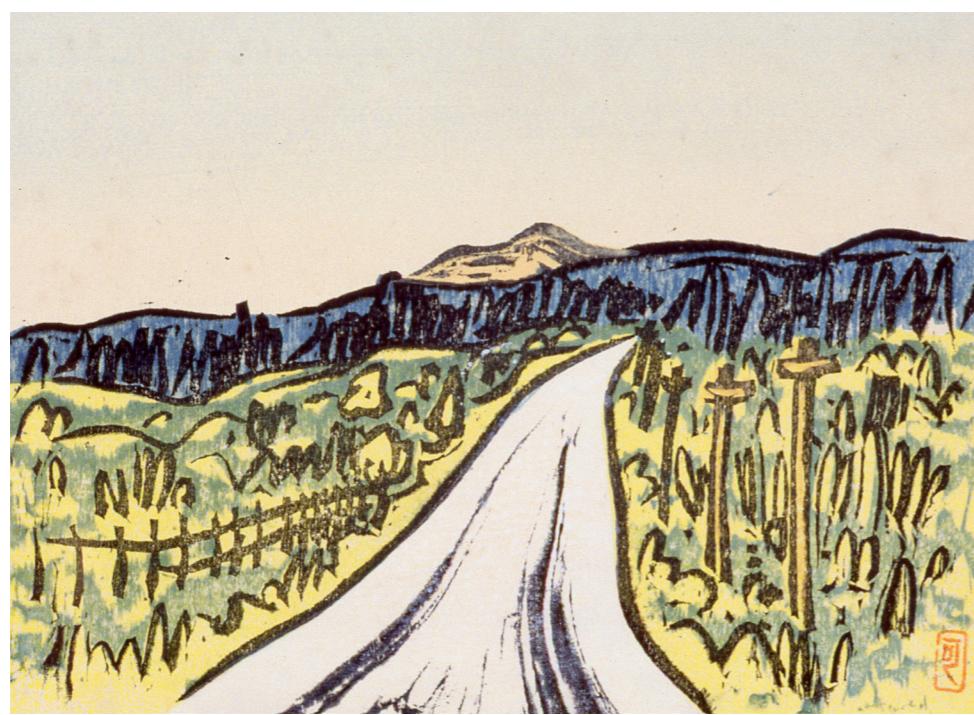
1939年(昭和14年) 37歳



あずまや 1939 木版画 21.0 x 27.3

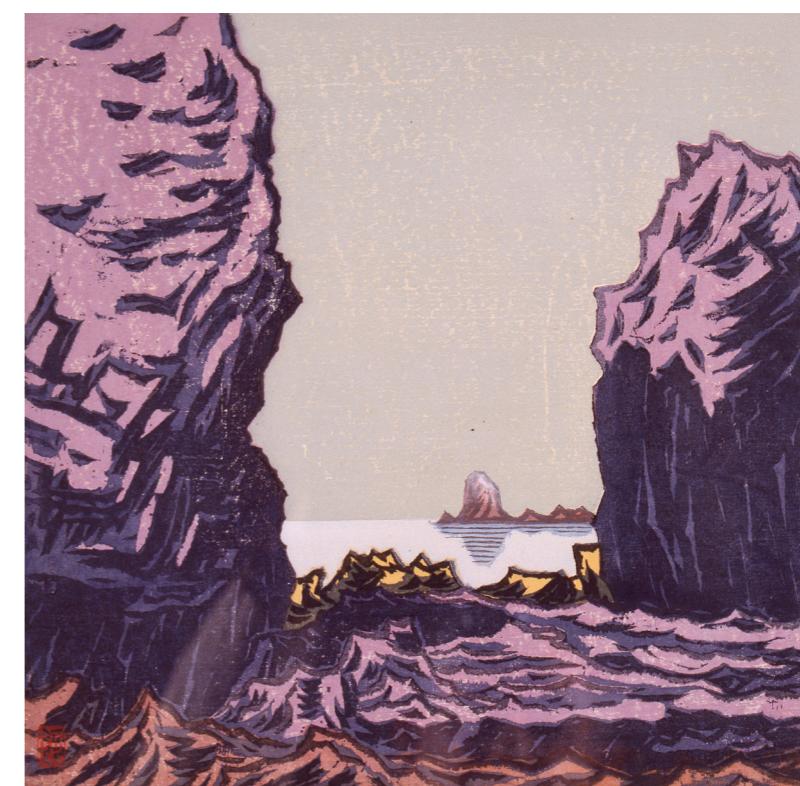


椿の咲く庭 1939 木版画 21.1 x 25.8



ドライブウェー 1939 木版画 12.7 x 17.6

1940年(昭和15年) 38歳



1940年(昭和15年) 38歳



羽豆岬 1940 木版画 28.5 x 36.7



篠島風景(B) 1940 木版画 28.5 x 36.7



玉葱となんばん 1940 木版画 29.5 x 29.0

1941年(昭和16年) 39歳



知多の海 1941 木版画 11.3 x 16.0



湖に行く道 1941 木版画 29.3 x 37.5

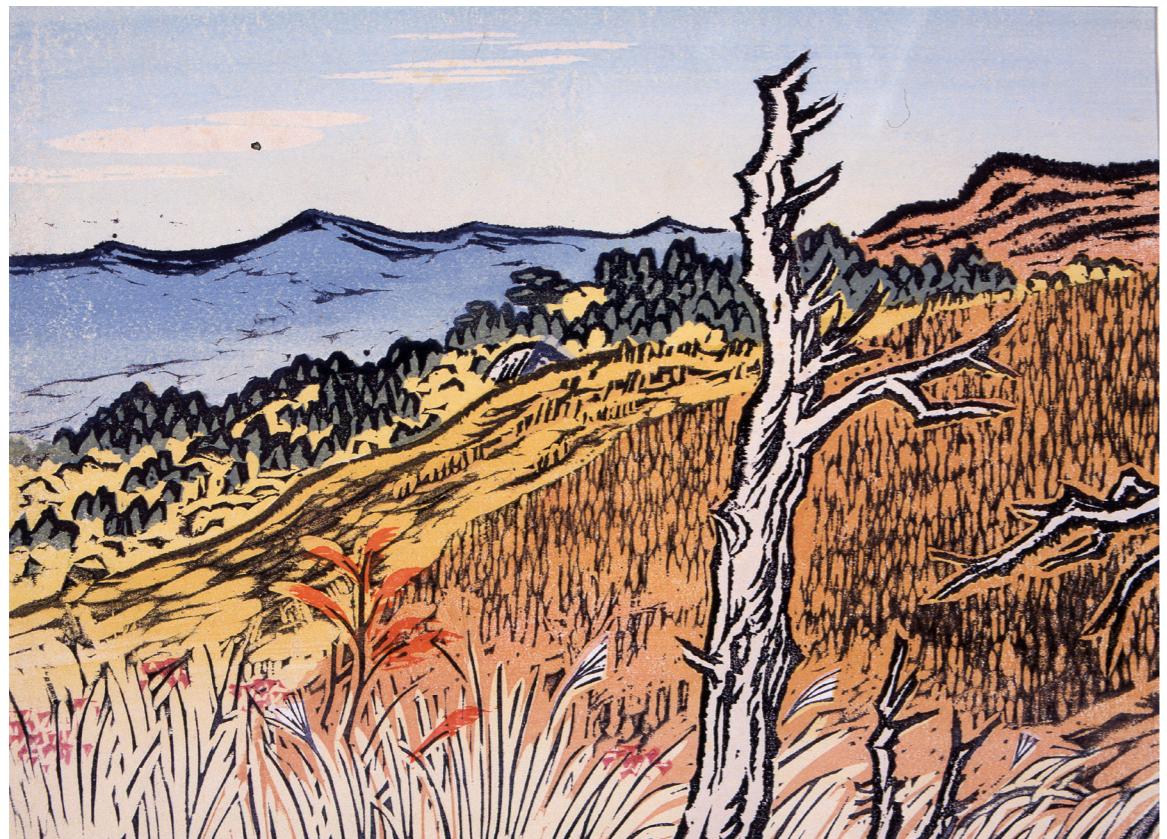


晩秋 1941 木版画



湖畔 1941 木版画 29.2 x 39.5

1942年（昭和17年）40歳



秋の山 1942 木版画 23.4 x 31.7



御岳高原 1942 木版画 23.4 x 30.4



答志風景 1942 木版画 11.8 x 14.9

第3章 風景の黒単色木版画

1945年～1959年（昭和20年～34年）43歳～57歳

木版画を始めた頃の多色の木版画に対して、この時期には力強く太めの黒単色の線で構成された風景を特徴とする、独自の木版画の世界を創り上げている。

題材としては、心地よい水音が聞こえてくるせせらぎ、薦がからまり古い壺のある庭、神社仏閣の山道などをとり上げている。この時期の版画では、水の流れや風を滑らかな線の集まりで描き、版本を削る刀の勢いを感じる力強い線で木々や岩を描いている。グラデーションのない単純な黒一色でありながら、自然の色や音を感じさせる作品となっている。

この時期にも時間があれば、よく旅行に出かけ、構図を重視した木版画は旅のスケッチをもとに制作された。

1945年（昭和20年）43歳



渓 1945 木版画 37.3 x 43.2



廃園 (A) 1945 木版画 35.0 x 44.0

1948年（昭和23年）46歳



神宮参道 1948 木版画 43.5 x 59.5

1949年（昭和24年）47歳



桃とびわ 1949 木版画 37.3 x 43.2

1950年（昭和25年）48歳



奈良公園 1950 木版画 43.5 x 60.0



廃屋 1952 木版画 43.5 x 59.0

1954年（昭和29年）52歳

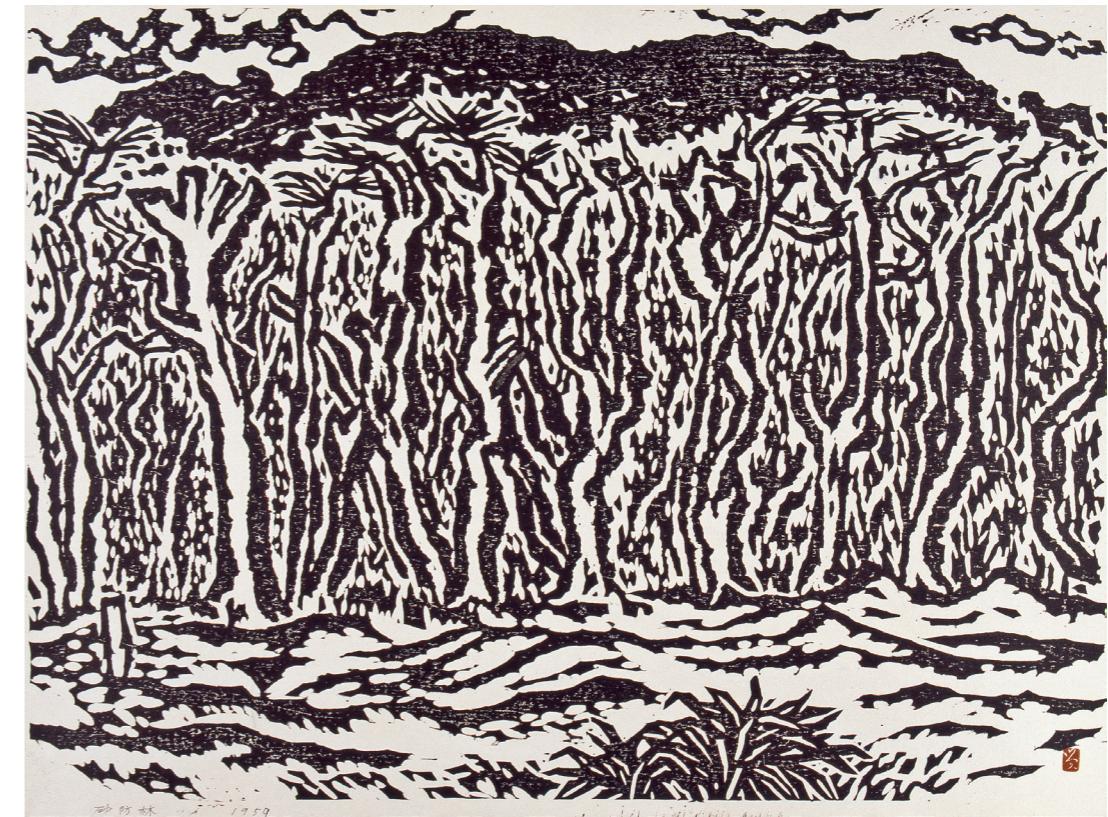


山の参道 1954 木版画 41.5 x 57.0



溪流 1956 木版画 41.5 x 59.5

1959年（昭和34年）57歳



防砂林 1959 木版画 43.5 x 59.0



廃園 (B) 1954 木版画 43.0 x 58.5

第4章 半抽象的な黒単色木版画

1964年～1968年（昭和39年～43年）62歳～66歳

1964年に高校の教師を退職して、版画制作に時間かけることができた時期である。これまでの写実的な版画とは一線を画する半抽象的な版画を制作している。

最初は黒単色の「雪シリーズ」、「花シリーズ」であり、やや不気味さが感じられるインパクトのある作品である。その後、同様の作風の2色程度の「雪シリーズ」である。

これまでの写実的なスケッチに基づく版画ではなく、半分抽象的な版画の実現を目指して、題材、作風、技法を確立するために、多くの挑戦を行い、大いに苦労した後がうかがえる。

1964年（昭和39年）62歳



雪 (B) 1964 木版画 56.5 x 43.0

1964年（昭和39年）62歳



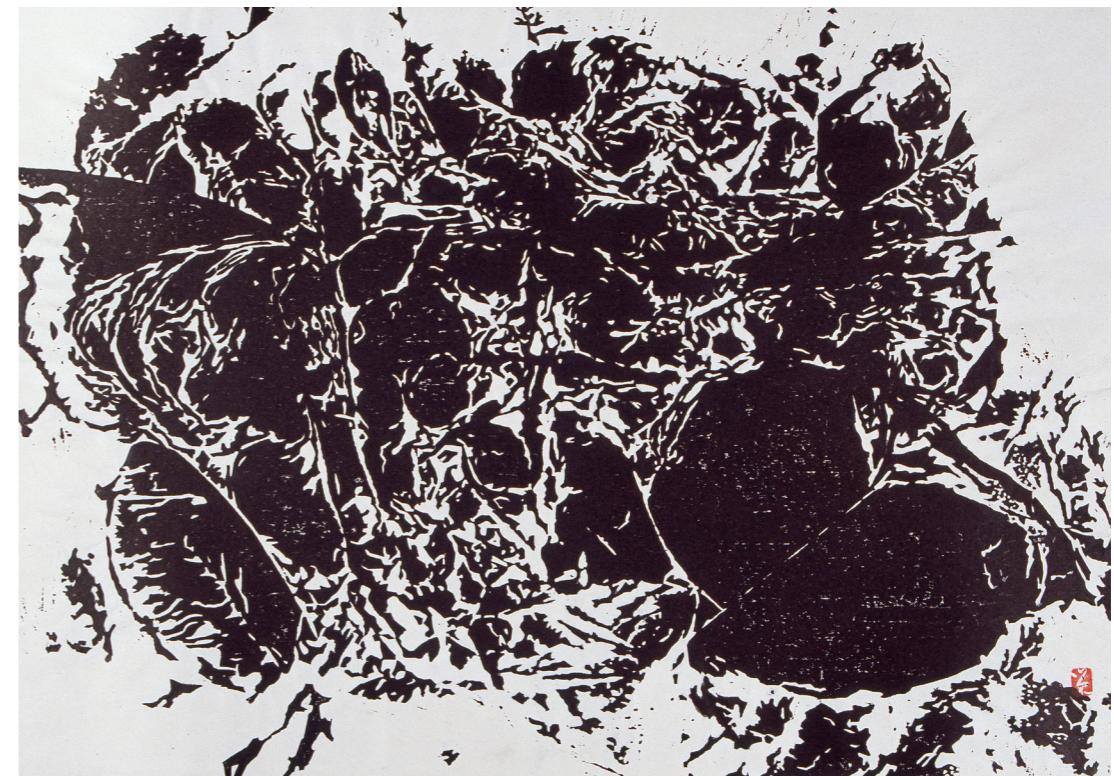
雪 (D) 1964 木版画 58.5 x 43.5

1964年（昭和39年）62歳

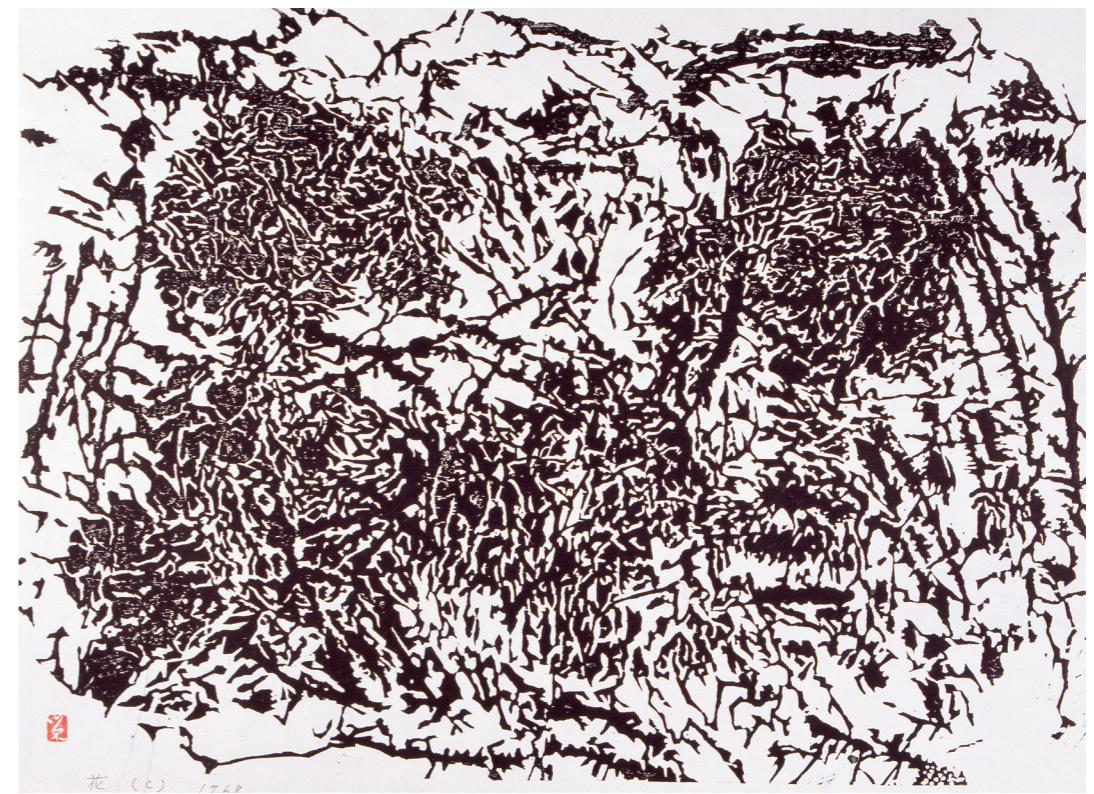


雪 (E) 1964 木版画 58.5 x 41.0

1968年（昭和43年）66歳



花 (A) 1968 木版画 40.5 x 57.5



花 (C) 1968 木版画 40.5 x 57.5

1969年（昭和44年）67歳

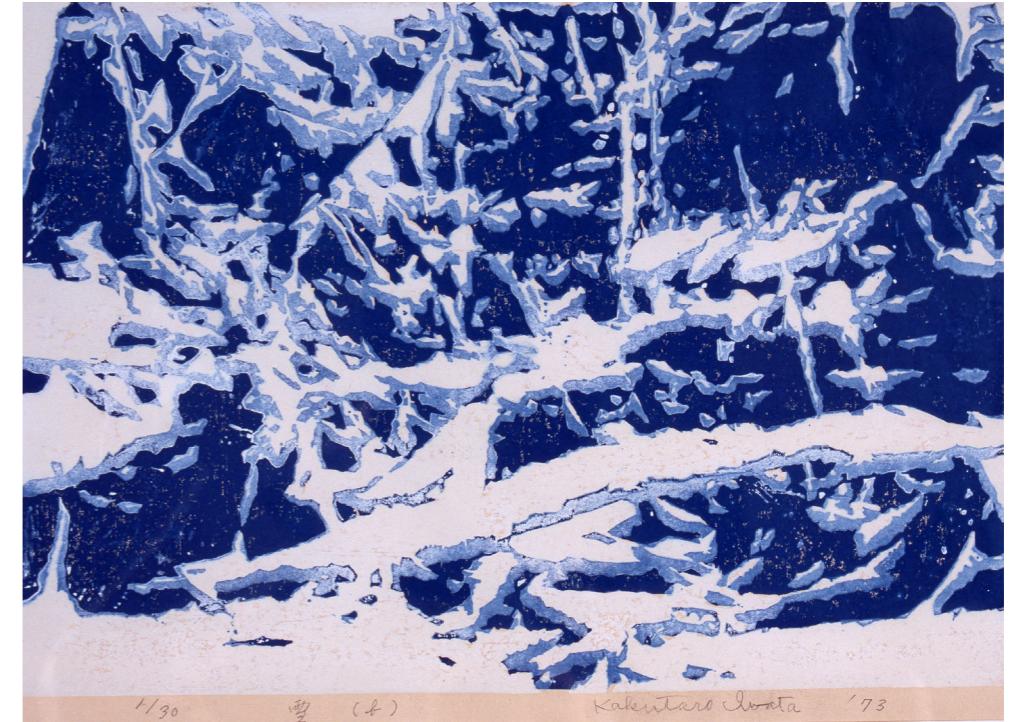


樹林 (A) 1969 木版画 41.0 x 56.0



樹林 (B) 1969 木版画 41.0 x 56.0

1973年（昭和48年）71歳



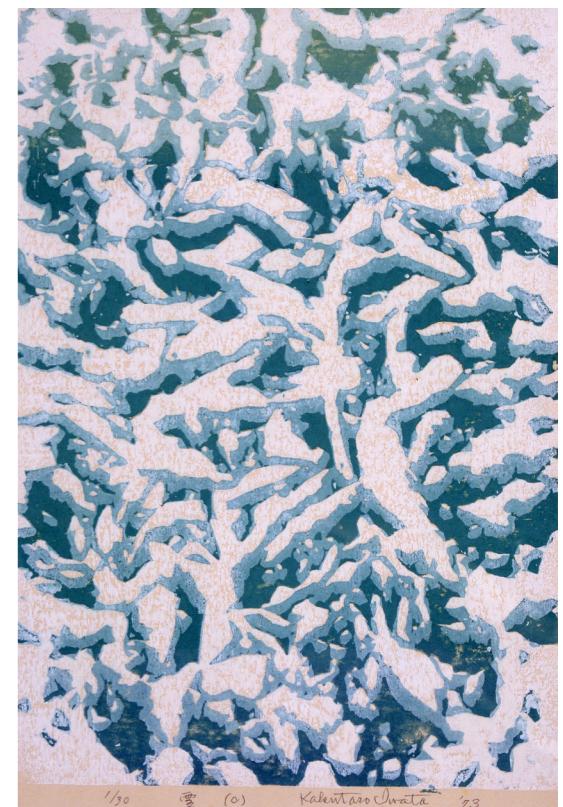
1/30 雪 (b)

Kakutaro Iwata '73

雪 (b) 1973 木版画



1/30 雪 (d) Kakutaro Iwata '73



1/30 雪 (o) Kakutaro Iwata '73

第5章 写実的静物の多色木版画

1975年～1983年（昭和50年～昭和58年）73歳～81歳

1975年（昭和50年）73歳

70歳を超しても絵にチャレンジする意欲は衰えることはなく、花、魚、果物など日常どこにでもあるものを題材にして、写実的に表現した多色の木版画に到達した。

この多色木版画では、説明的な輪郭線は一切用いず、主題を単純な形で捉え、その持つ色を鮮やかに配し、それに最小限の影を加えて、その存在感、質感を自然に表現している。この単純化された主題を、空白を多く残した背景に置くことによって、伝統的な日本画の雰囲気をも融合させた新しい木版画の世界であると言えよう。

代表的な作品には「世界一」、「いしだい」、「泰山木」などがあり、題材に優しい目を向け、日常生活の一部としてその存在を捉えて、気張らずに自然に描き、彫り上げている。また、台所の隅で、干からびそうになった豆や魚などにも命を与えていた。

この時代の作品はスケッチを基本にして、構図を洗練することを最も大事にした覚太郎の考えが具現化されたものであろう。木版画を始めて50年を経て、種々の挑戦や挫折を経て、到達した世界であり、自身の生涯で最も充実感を感じていた時代であったと思われる。

この時期の作品は国立国際美術館（大阪）、愛知県美術館（名古屋）、半田市博物館などに収蔵されており、版画の特徴を活かして、多くの版画愛好家にも楽しめている。また、版画五人展で毎回販売された五人の小さい作品をセットにした版画五人集は多くの人に親しまれている。



ゴールデンデリシャス 1975 木版画 43.5 x 28.5

1975年（昭和50年）73歳

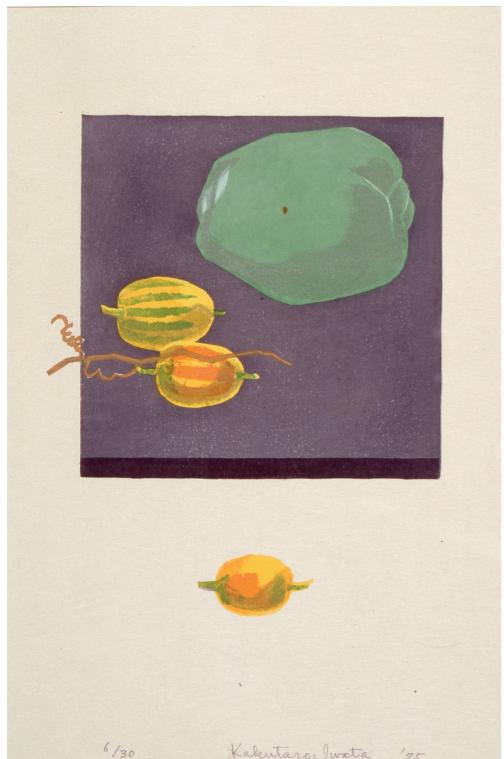


いか 1975 木版画 43.5 x 28.5



なんてんの実 1975 木版画 43.5 x 28.5

1975年（昭和50年）73歳



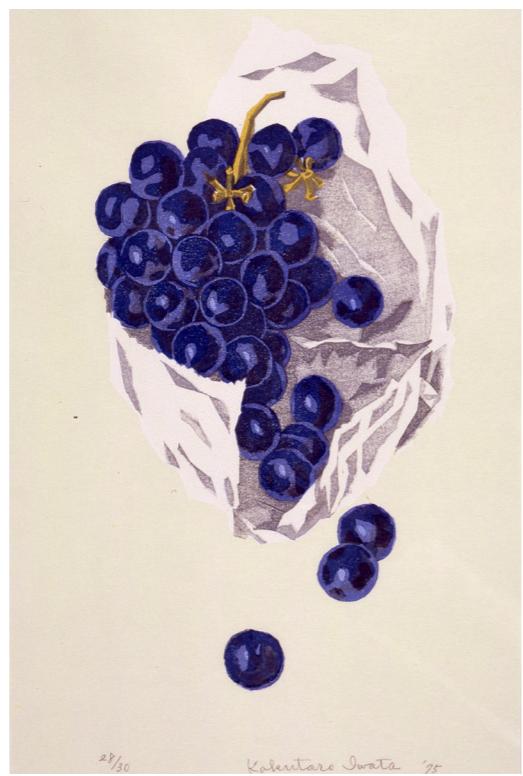
6/30 Kakeru Iwata '75
かりんと烏瓜 1975 木版画 34.5 x 23.3



12/30 Kakeru Iwata '75
烏瓜 1975 木版画 34.5 x 23.3



8/30 Kakeru Iwata '75
湯葉 1975 木版画 34.5 x 23.3



28/30 Kakeru Iwata '75
ぶどう (B) 1975 木版画 34.6 x 23.0

1976年（昭和51年）74歳



34/35 Kakeru Iwata '76
紅白椿 1976 木版画 43.5 x 28.5

1976年（昭和51年）74歳



キャベツ 1976 木版画 50.5 x 35.5



赤いピーマン 1976 木版画 34.5 x 23.0

1977年（昭和52年）75歳



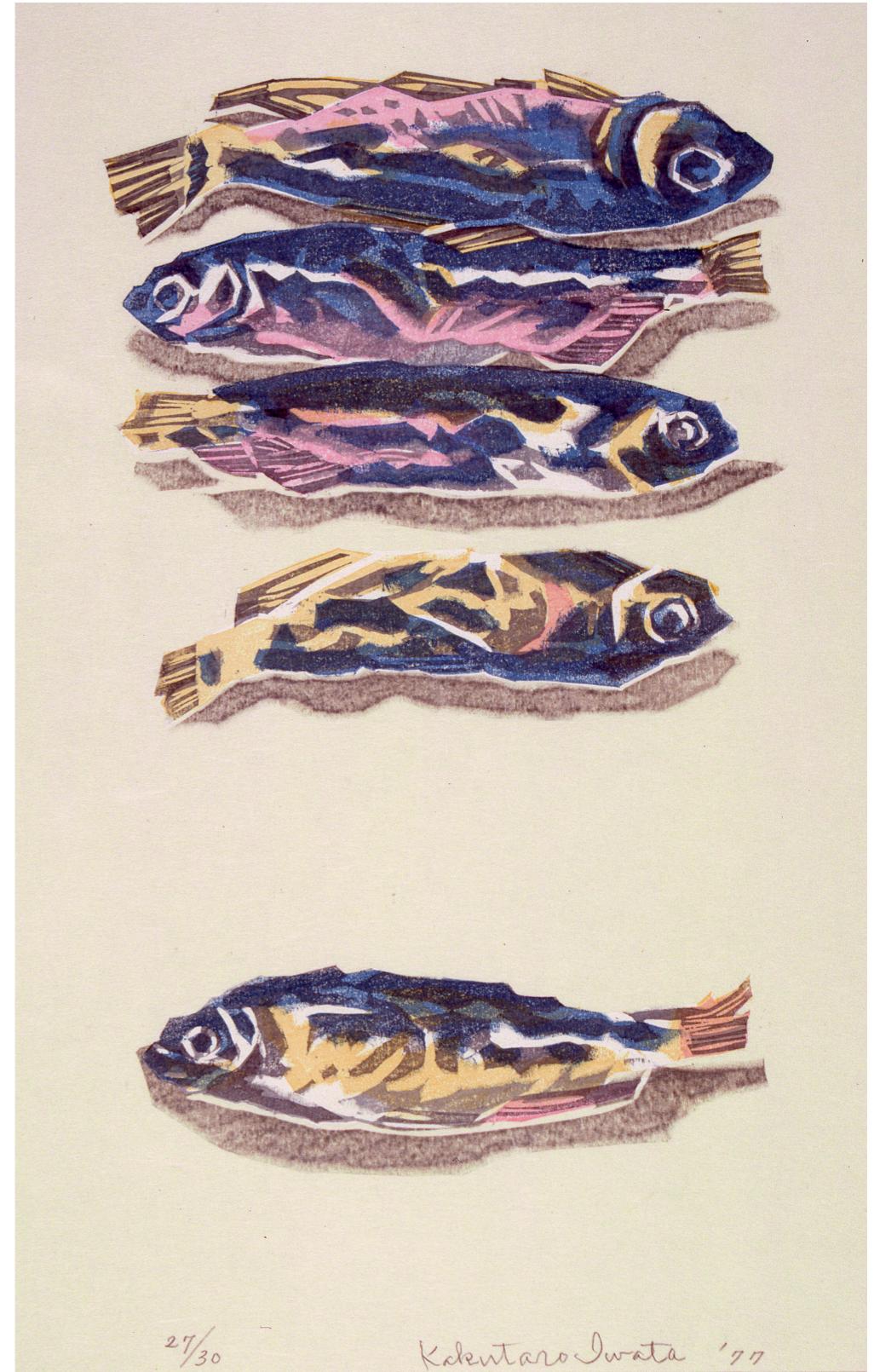
1977年（昭和52年）75歳



1977年（昭和52年）75歳

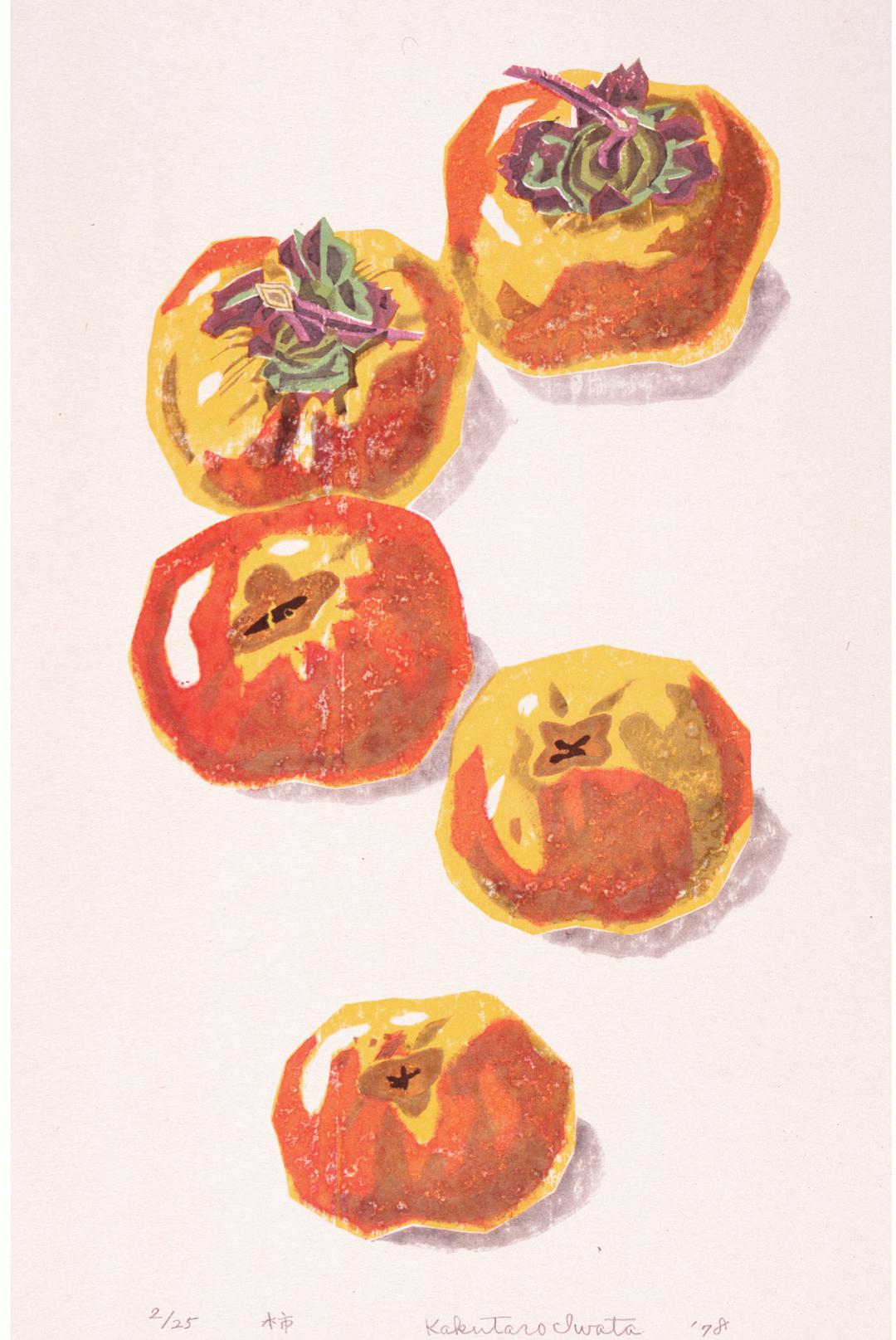


ばら 1977 木版画 53.5 x 35.5



しらはえ 1977 木版画 34.6 x 23.3

1978年（昭和53年）76歳



1978年（昭和53年）76歳

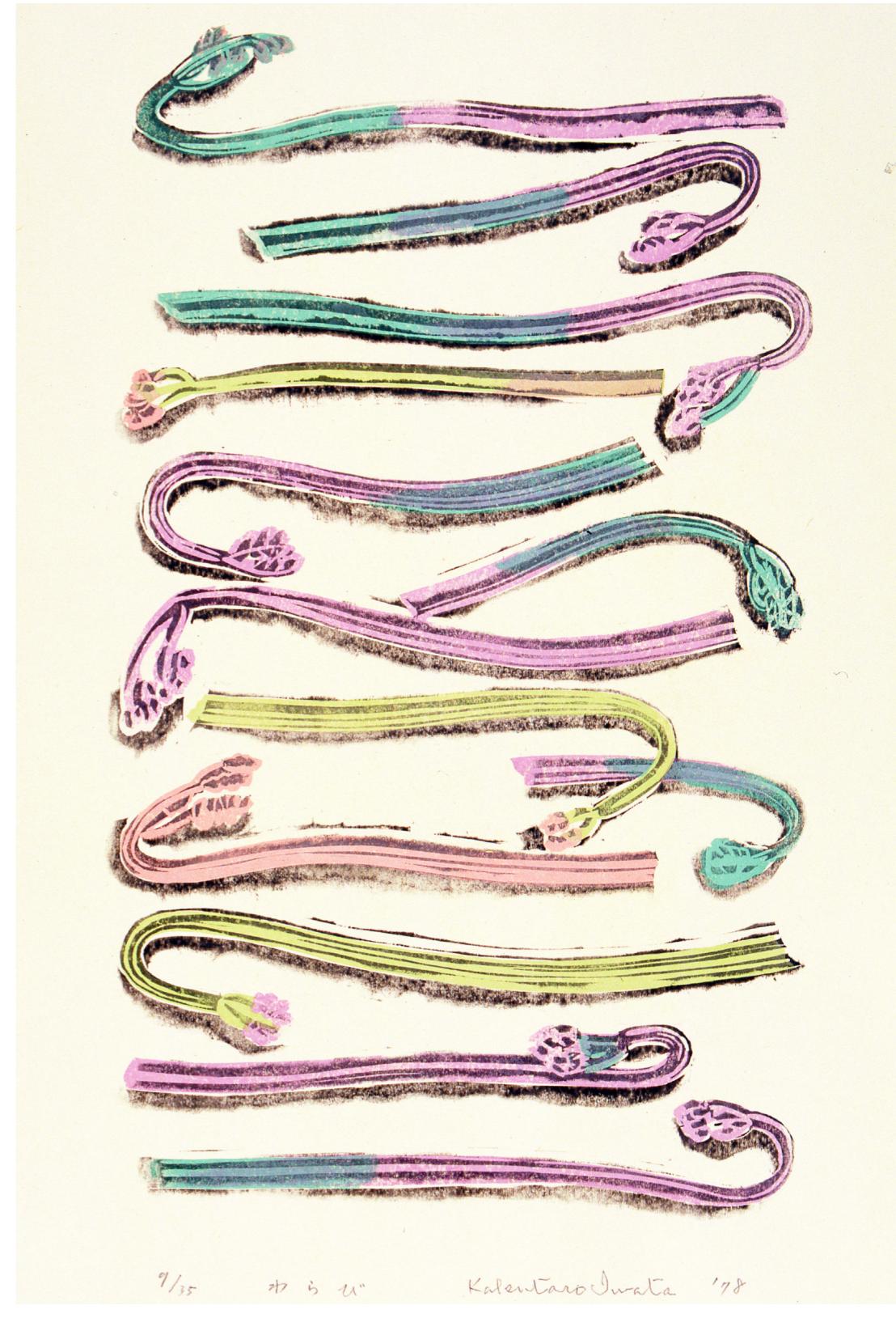


23/30

丸いわし

Kakutaro Iwata 1978

丸いわし 1978 木版画 53.5 x 35.5



9/35

わらび

Kakutaro Iwata 1978

わらび 1978 木版画 43.5 x 28.5

1978年（昭和53年）76歳



せんめ 1978 木版画 53.5 x 35.5

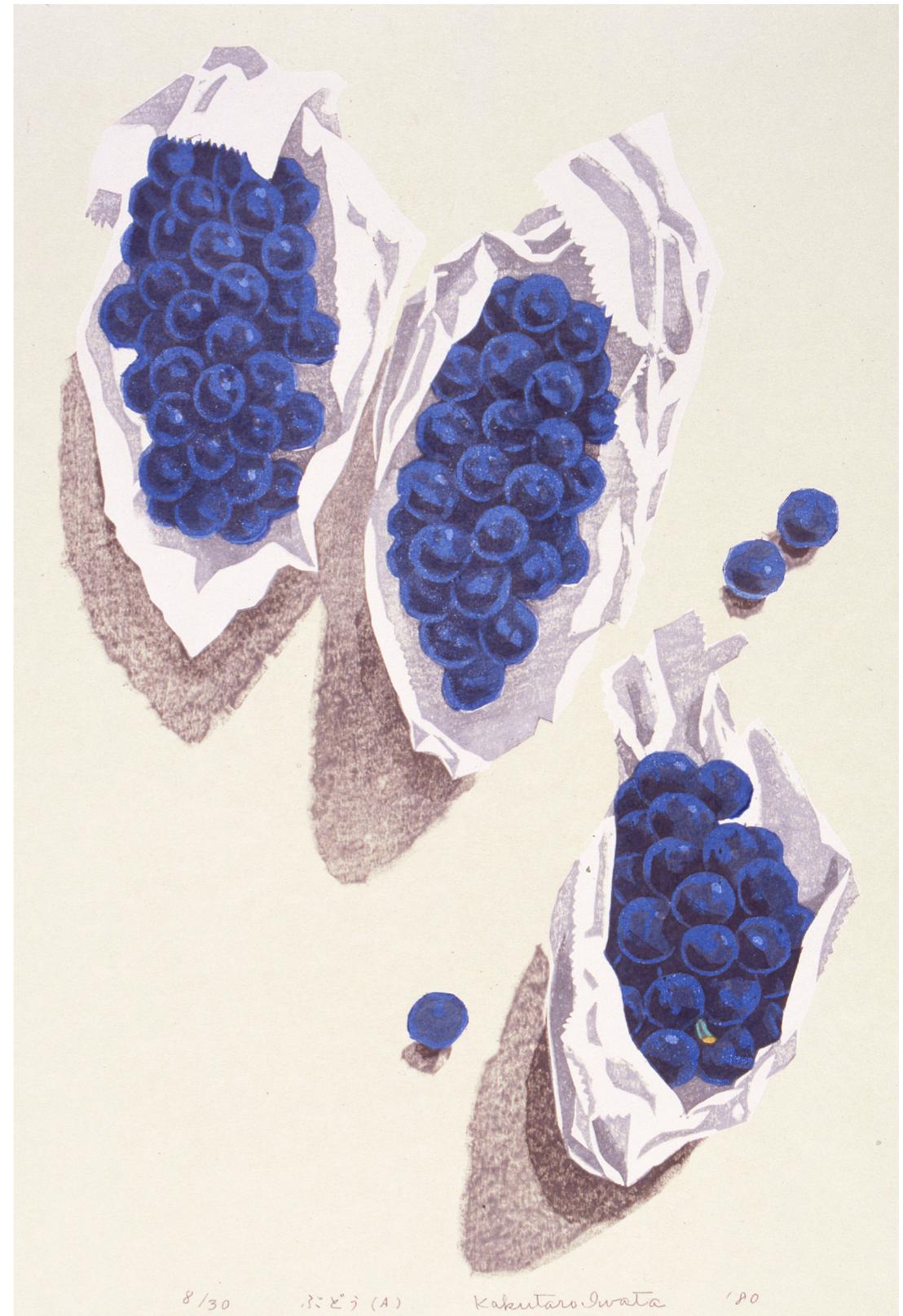


しょうじょう 1978 木版画 34.6 x 23.0



ぬけ 1978 木版画 34.6 x 23.0

1980年（昭和55年）78歳



ぶどう (A) 1980 木版画 53.5 x 35.5

1980年（昭和55年）78歳



1981年（昭和56年）79歳



1982年（昭和57年）80歳



赤かぶ 1982 木版画 43.5 x 28.5



いしだい 1982 木版画 53.5 x 35.5

1982年（昭和57年）80歳



びわ 1982 木版画 53.5 x 35.5



ぼたん 1982 木版画 53.5 x 28.5



ねむの花 1982 木版画 53.5 x 28.5



イスメネ 1982 木版画 43.5 x 28.5

1983年（昭和58年）81歳



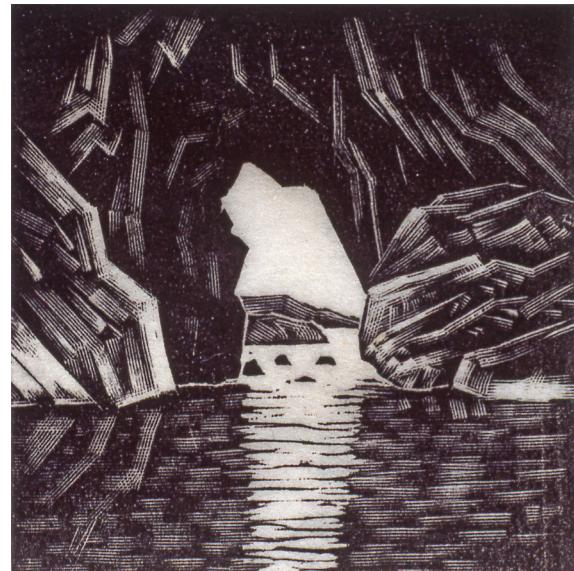
A.P 焼はぜ Kakutaro Iwata '83

焼はぜ 1983 木版画 43.5 x 28.5

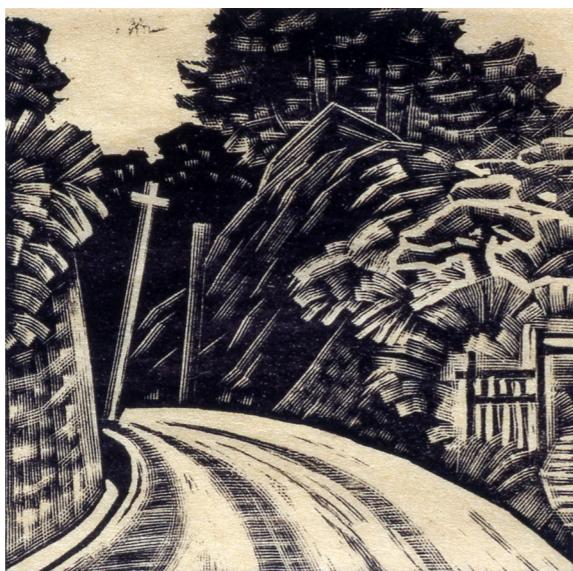
第6章 木版画の小品

本章では、各時代の小品をまとめた。木版画の小品は版画五人展などで販売されたので、多くの人が手にしている。それ以外には、木口木版画、蔵書票木版画、年賀状、カレンダーなどがある。これらはすべて、人の手に渡ることを意識して、一品毎に大事に制作されたものである。

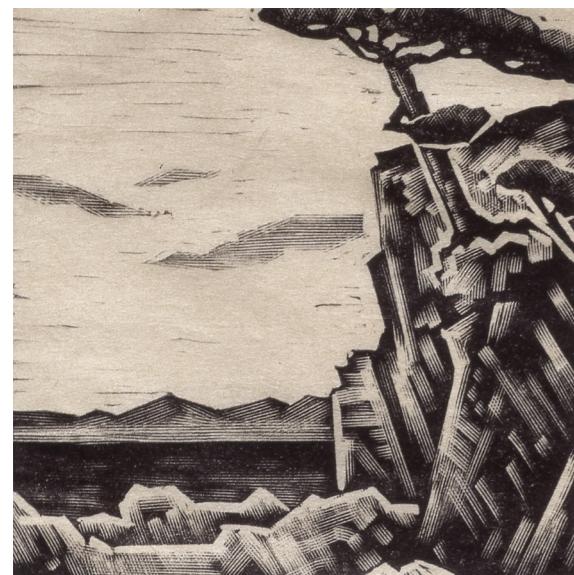
1936～1937年（昭和11年～12年） 木口木版画



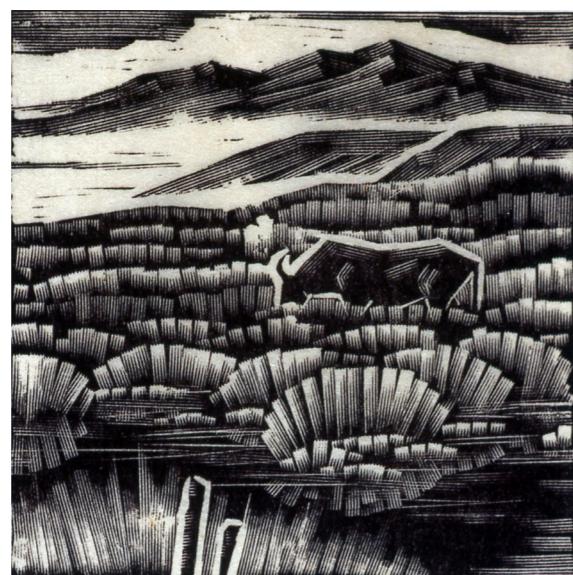
石門 1936 木口木版画 6.0 x 6.0



内海風景 (A) 1936 木口木版画 6.0 x 6.0



篠島風景 1937 木口木版画 6.0 x 6.0



牛のいる風景 1965 木口木版画 6.0 x 6.0

1937～1939年（昭和12年～14年）蔵書票（エクスリブリス）



花 1937
木版画 6.0 x 6.0



くちなみ 1937
木版画 7.1 x 6.6



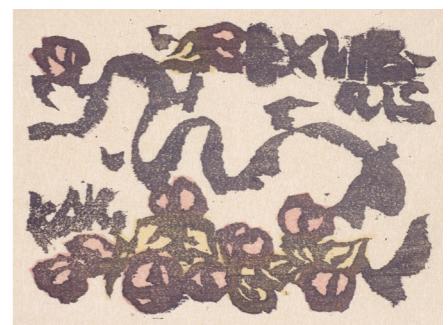
島 1937
木版画 8.1 x 5.3



うめもどき 1937
木版画 6.0 x 6.0



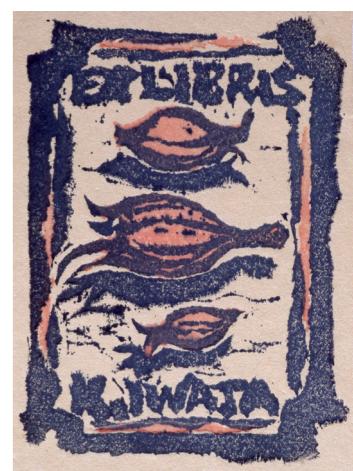
鳥 1937
木版画 7.5 x 5.5



のうぜんかずらの花 1939
木版画 6.0 x 6.0



ばら (ex) 1938
木版画 9.0 x 12.3



くちなみの実 1939
木版画 9.0 x 6.5

1939年(昭和14年) 37歳



朝の海 1939 木版画 9.0 x 12.1



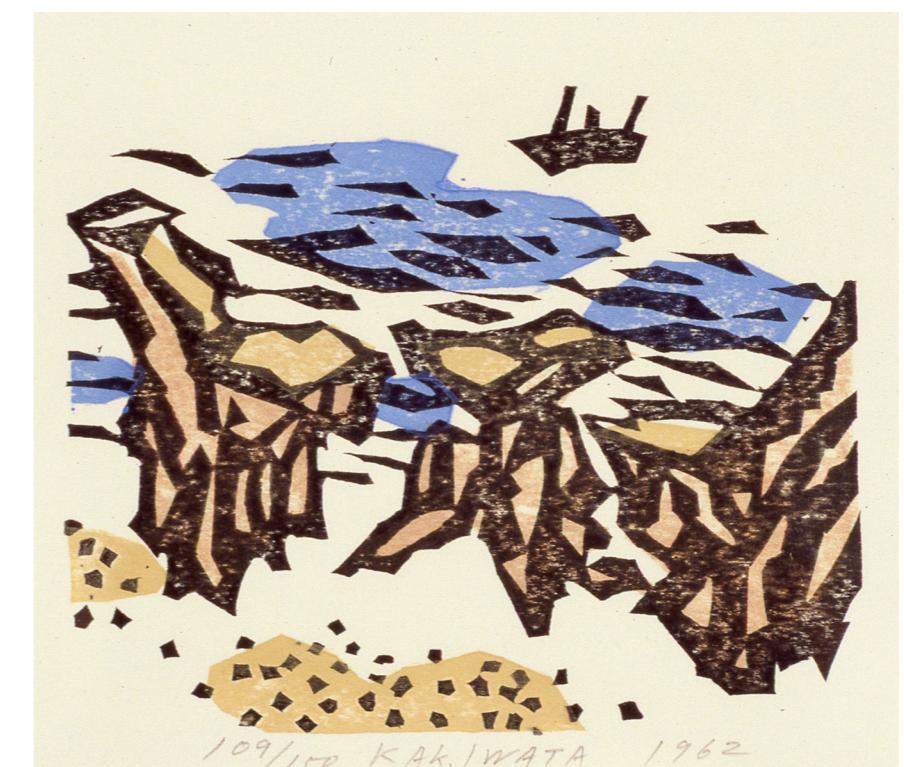
夕の海 1939 木版画 9.9 x 12.1

1961年(昭和36年) 59歳



海 (A) 1961 木版画 9.4 x 13.9

1962年(昭和37年) 60歳



109/150 KAKIWATA 1962

海 (B) 1962 木版画 12.9 x 14.4

1964年（昭和39年）62歳



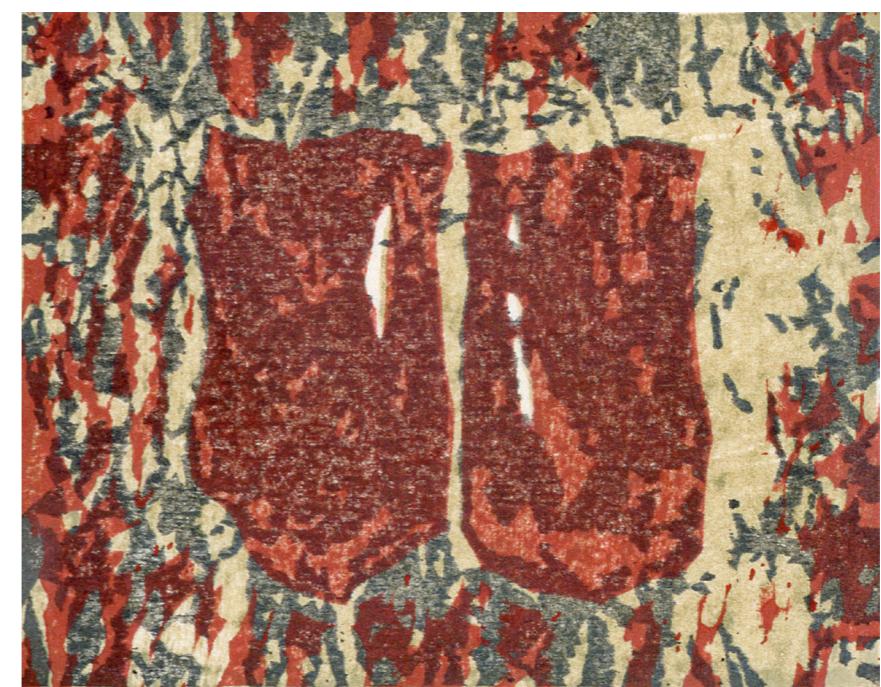
花(a) 1964 木版画 10.0 x 14.0

1966年（昭和41年）64歳



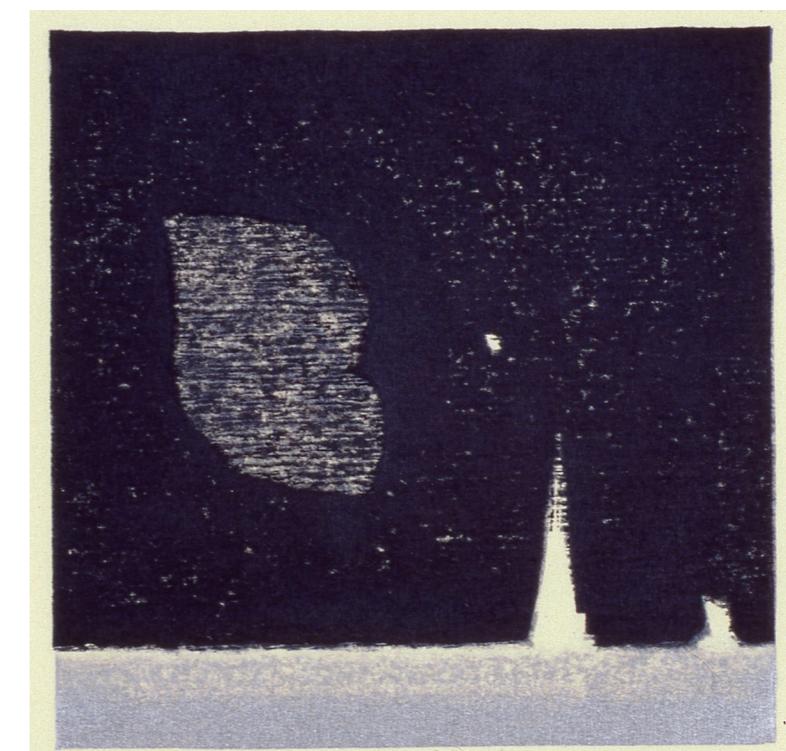
102/150 1966 Kakutaro Iwata
樹林 1966 木版画 10.0 x 14.0

1967年（昭和42年）65歳



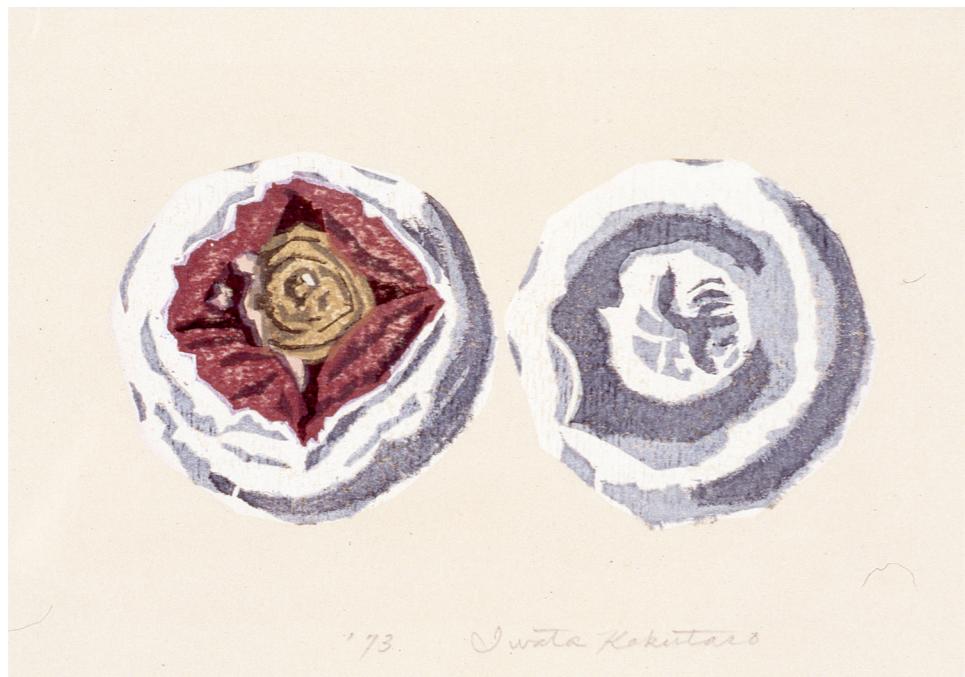
花(B) 1967 木版画 10.0 x 14.0

1970年（昭和45年）68歳



夜 1970 木版画 12.0 x 12.0

1973年（昭和48年）71歳



173. Iwata Kakutaro

ころがき 1973 木版画 12.4 x 17.2

1976年（昭和51年）74歳



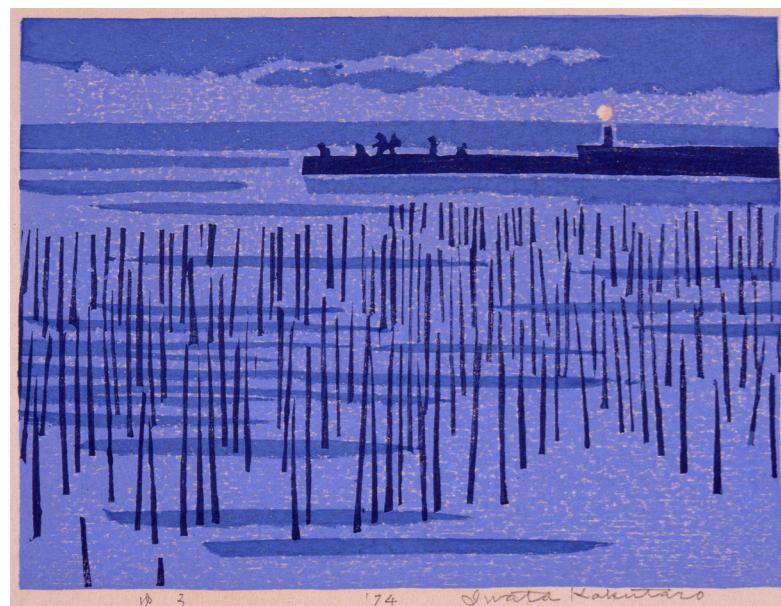
176. Iwata Kakutaro

アンスリューム 1976 木版画 16.0 x 10.5



2/10 あがらつぼ 176. Iwata Kakutaro

油壺 1976 木版画 13.8 x 14.9



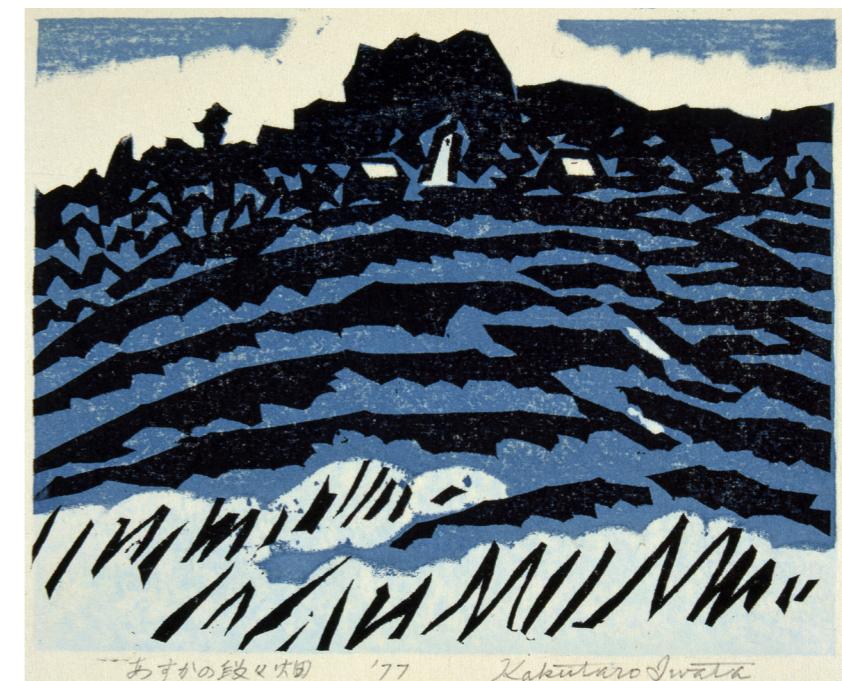
174. Iwata Kakutaro

夕 1974 木版画 12.0 x 15.8



蝶 1974 木版画蔵書票 8.2 x 6.2

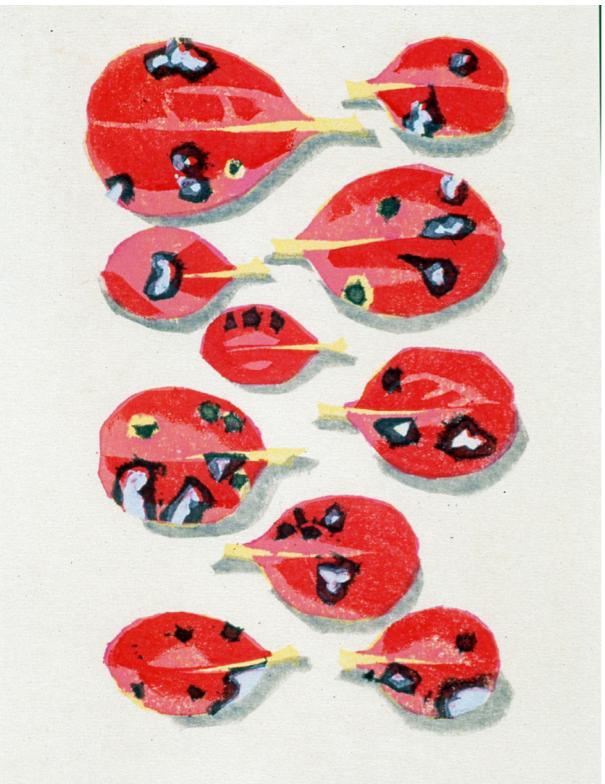
1977年（昭和52年）75歳



あすかの段々畑 177. Iwata Kakutaro

あすかの段々畑 1977 木版画 14.0 x 15.0

1977年（昭和52年）75歳



落葉 1977
木版画 16.0 x 10.5

1981年（昭和56年）79歳



A.P. ポインセチア Kakutaro Iwata '81
ポインセチア 1981 木版画 26.7 x 19.0



13/35 百日草 Kakutaro Iwata '81
百日草 1981 木版画 26.8 x 19.0

1979年（昭和54年）77歳

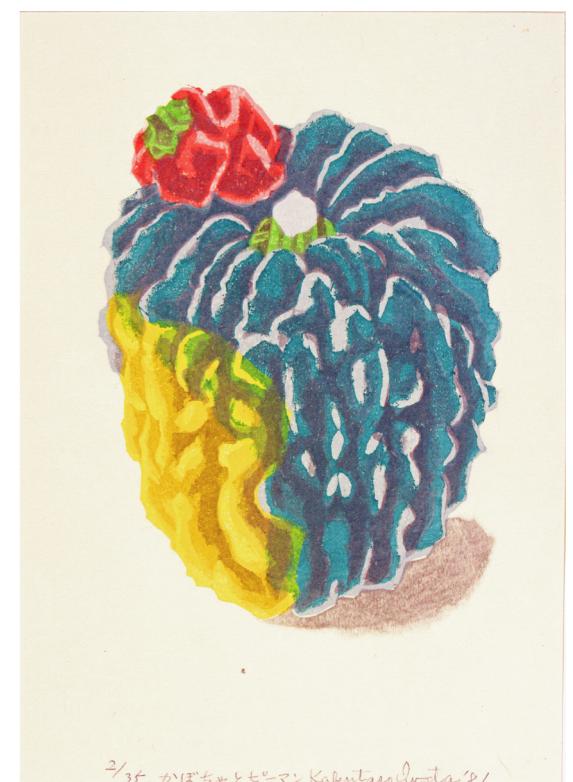


Kakutaro Iwata '79

黄色いばら 1979 木版画 14.6 x 14.6



13/35 コルチカム Kakutaro Iwata '81
コルチカム 1981 木版画 26.8 x 19.0



2/35 かぼちゃとピーマン Kakutaro Iwata '81
かぼちゃとピーマン 1981 木版画 26.8 x 19.0

1945年(昭和20年) 43歳 カレンダー



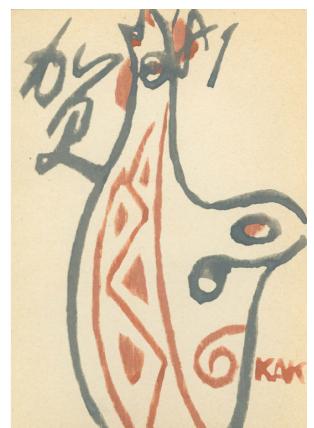
1978年～1993年 晩年の年賀状



1978年



1979年



1981年



1983年



1984年



1985年



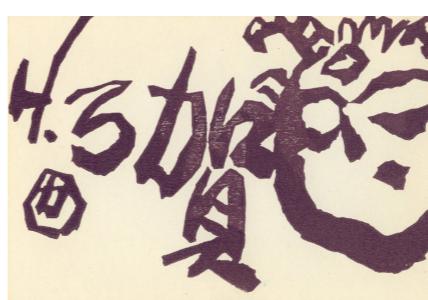
1988年



1990年



1989年



1991年



1992年



1993年

1988年（昭和63年）86歳



春野 1988 木版画 12.2 x 8.0

第7章 晩年の日本画調の水彩画

85歳を越えると木版画の彫りや摺りに必要な体力がなくなったため、青春時代に目指し、習得した日本画の技法を用いて、水彩画を描いている。90歳前後の作品とは思えない大作であり、構図、色彩、筆の運びなどすべてに若々しさがあふれている。

1986年（昭和61年）84歳



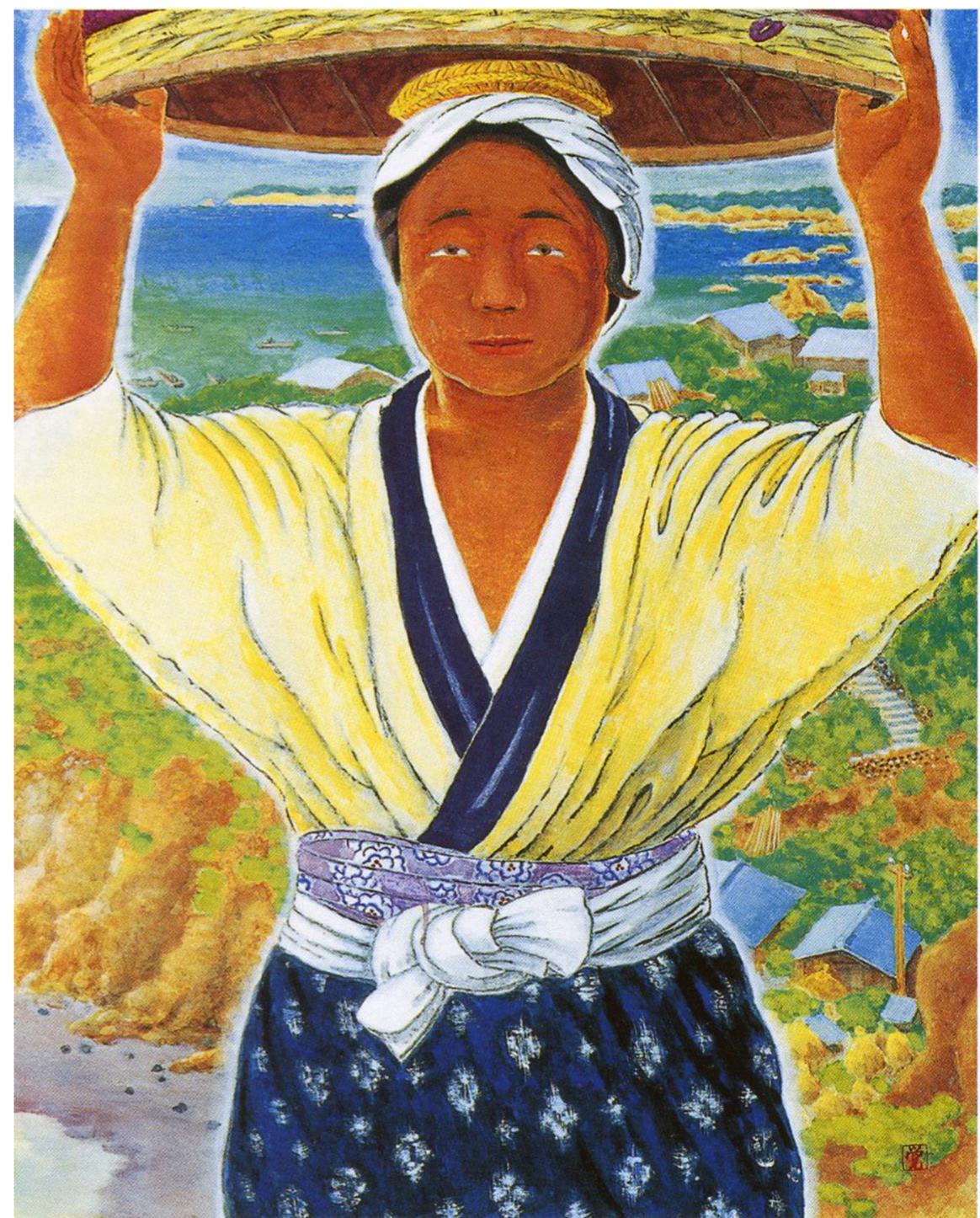
ウ瓜（水彩）年代不詳 水彩画

1988年(昭和63年) 86歳



綿の花 年代不詳 水彩画

1990年(平成2年) 88歳



海女 1990 水彩画 91 x 73

1991年(平成3年) 89歳



ドライフラワーと梱達 1991 水彩画 80 x 65
自宅の応接間に置かれたお気に入りの置物が描かれている

1993年(平成5年) 91歳



花惜しむ枝垂梅 1993 水彩画 73x91

1994年(平成6年) 92歳



寄り合う木のころ達 1994 水彩画 80 x 65
家族への思いが感じられる最後の作品

第8章 学生時代の日本画と大和絵模写

東京美術学校の日本画科に在学中に、花などの静物や人物の日本画を描いた。これらはいずれも色彩のある作品であり、東京藝術大学に所蔵されているが、カラー画像データがないために本画集では古い白黒の写真原板を使用した。

花や葉は実に生彩に描かれており、白黒でもその色を想わせ、生き生きとした植物の様が伝わってくる。卒業制作「果園」では、多くの画面を使って、複数の女性を描いているが、タイトルは果園になっている。また、「日傘」も同様であるが、白黒であるために日傘の存在感が今一つ伝わらないの残念である。これは第6回の帝展に出品された作品と思われる。

1926年(昭和元年) 24歳



菊 1926 日本画 63.9×43.1 東京藝術大学所蔵



吹上菊 1926 日本画 63.9×43.0
東京藝術大学所蔵

1926年(昭和元年) 24歳



龍膽 (りんどう) 1926 日本画 63.9 × 43.0
東京藝術大学所蔵

1928年(昭和3年) 26歳



日傘 1928 日本画 187.0 × 83.5 第9回帝展出品作品 東京藝術大学所蔵

1926年(昭和元年) 24歳



「果園」は東京美術学校日本画科の卒業制作として力を込めて描いた作品である。ぶどう園に遊ぶ若い日本人女性を描いている。この作品は現在はフランスに渡っていると聞いている。

果園 1926 日本画(卒業制作 日本画科) 写真乾板東京藝術大学所蔵

東京美術学校で大和絵を専門とする教授松岡映丘に師事した研究科時代に、国宝を含む多数の大和絵の模写を行った。これは原画を観て、作者の心に触れながら、辛抱強く精密に写し取る作業の中で、日本画の技法と心を学ぶ得がたい体験であったであろう。

以下の大和絵模写作品は半田市立博物館に所蔵されている。



鳥毛立女屏風 第六扇 (模写) 118.5 x 52.5
奈良 正倉院北倉館所蔵 奈良時代



鳥毛立女屏風 第一扇 (模写) 118.5 x 52.5
奈良 正倉院北倉館所蔵 奈良時代



北野天神縁起 第四卷 第二段 筑紫への船出 (模写) 58 x33
京都 北野天満宮所蔵 鎌倉時代 国宝



葉月物語絵巻 露顕の儀 (模写) 34.5 x 30.5
愛知 徳川美術館所蔵 平安時代後期 重要文化財



秦弘方

秦久方

隨身庭騎絵巻 (模写) 35.0 x 26.2
東京 大倉文化財団所蔵 鎌倉時代 国宝



鳥獸人物戯画 馬 (模写) 29 x 54
京都 高山寺所蔵 平安時代 国宝



妙法蓮華経 第一巻 扇面九 文を読む公卿と童女 (模写) 39.5 x 57
大阪 四天王寺所蔵 平安時代 国宝



鳥獸人物戯画 犬 (模写) 29 x 67
京都 高山寺所蔵 平安時代 国宝

第9章 スケッチ

覚太郎は生涯を通してスケッチを描き続け、最後まで大事に手元に持っていたスケッチブックは133冊に達し、それには14200枚以上のスケッチが残されていた。その中身には、風景、静物、人物など多種多様であり、旅先で見つけた面白いもののメモ、版画の下絵となったものなどもある。100年以上前の古いものでは、カビが生えていたりして劣化していたり、用紙が変色したりしているが、描かれたものの本質は残されている。

スケッチは、絵で一番重視していた構図を練る場であり、また、絵を学ぶ人に、自分の感じたこと、構図の練り方、描き方などを示す時の道具でもあった。

本画集では紙面の都合があるため、ほんの一部しか掲載できないことが残念であるが、絵を描くことを愛した続けた覚太郎の思いを感じていただけるであろう。

1921年(大正10年)19歳 東京美術学校を目指した時代

最も古いスケッチには美術学校を目指して勉強していた頃のものがある。朝顔の花が描かれたり、鉛筆の輪郭に水彩絵の具で色がつけられており、絵に対する感性が感じられる。

また、朝顔を育てた優しい思いを残すメモも添えられている。

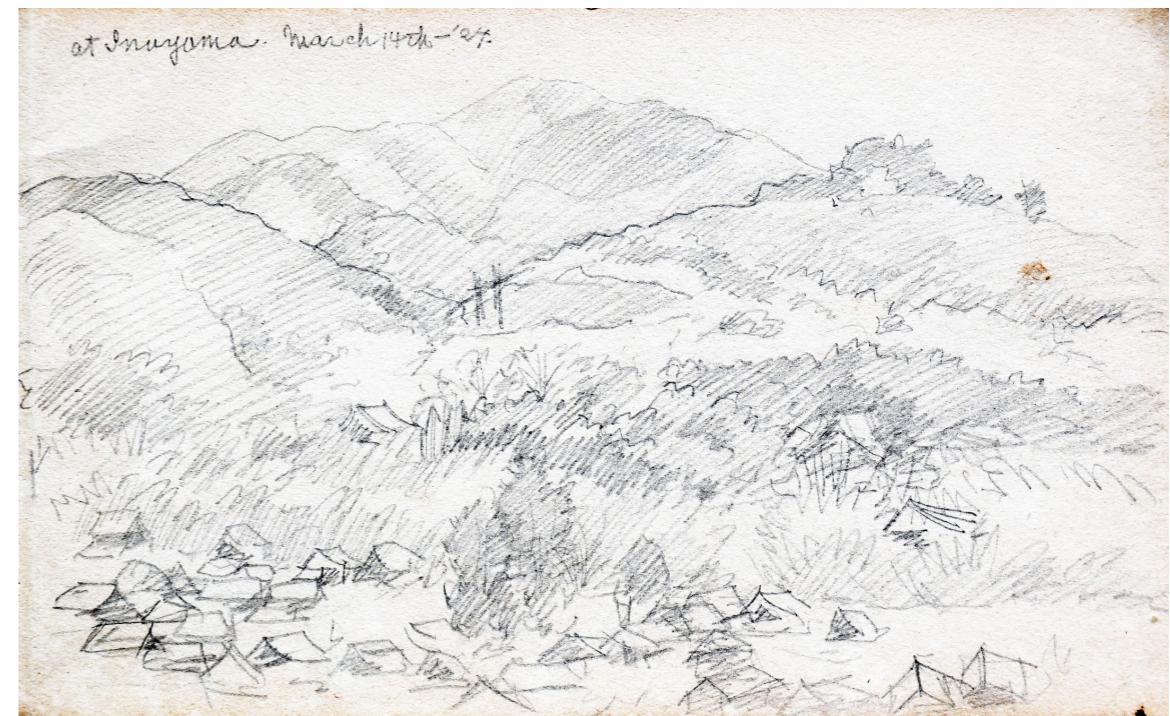


父が前から朝顔の苗を十本貰つて来た。
どうせ残りもの、これをはさかうる大きめの松ぼっくりの種子と一緒にこれでも
育へば木をへた。手始めがなく、少し大きめの木をへた。はじめ、三本づつに分けと
四本づつに分けた。三本づつに植えた。七本づつ大ぐさん葉が出て来て見ると
いかにもギラクさうなから、鉢を七つはいれしてやつた。少し大きくなつてから、
うえが大きくなるのは仲々大きくなつて、七本づつ一本は鉢を埋めなつてしまつた。やがて
大きくなつて、八本づつ植へた。大きめ前も、二本づつ大がくは多く、鉢一つに
やつた。——かうしてかくへたがうらうを思ふ。おとと七本づつ、六鉢になつた。
折角の薔薇が、いつまでも咲れで行つたのか? かつがりしたか? 今朝白は、はいみて
上り始めたやうな花が咲いた。薄いがつれから大きめとおも。おとと
色つづりはつづりあるが、よく見ると、切れ込みをついた貝殻は、おとと
同じで見られました。しかし他の花が咲いた。

七月十八日。

1924(大正13年)22歳 東京美術学校学生時代

学生時代からよくスケッチブックを持って旅行に出かけていた。郷里の愛知県葉栗郡玉の井の風景や知多半島の風景、東京の郊外の風景などがある。



犬山



国分寺

1924年(大正13年) 東京美術学校学生時代 故郷愛知県



知多半島の内海



玉の井の木曾川



玉の井の烟

1927年(昭和2年) 東京美術学校学生時代

珍しいスケッチとして、研究科時代の自画像や、恩師松岡映丘の夫人像がある。



自画像 1927



婦人像 1927

1940年（昭和15年）38歳

60歳頃までは覚太郎はスケッチブックを持って山や海や公園などにスケッチ旅行によく出かけ風景を描いた。高校のキャンプや美術部のスケッチ旅行などもあった。70歳以降は、主に花や魚のスケッチを行い、鉛筆画に水彩で色をつけたものもある。



1948年（昭和23年）46歳

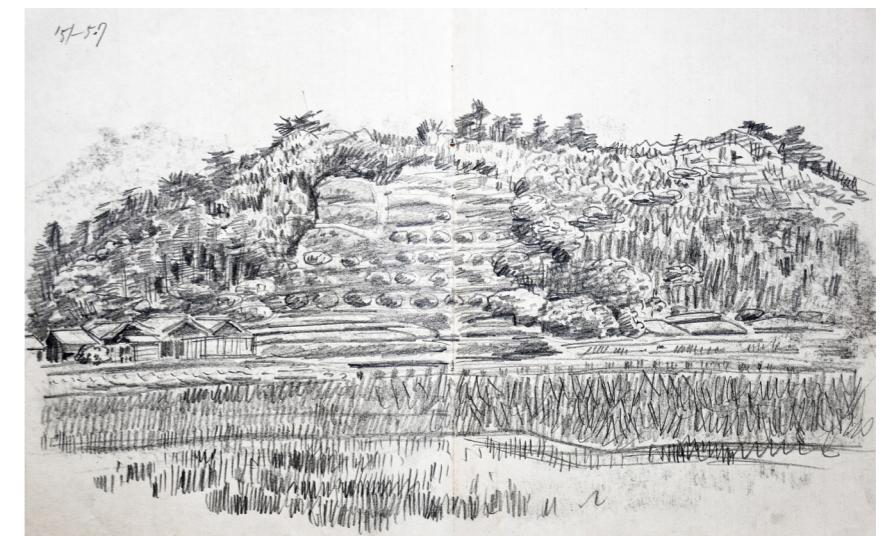


1950年（昭和25年）48歳



奈良公園

1951年（昭和26年）49歳



内海

1952年（昭和27年）50歳



奈良公園



廃屋

1963年(昭和38年) 61歳



内海

1970年(昭和45年) 68歳



1974年(昭和49年) 72歳



1977年（昭和52年）75歳



1979年（昭和54年）77歳



からすうり

1979年(昭和54年) 77歳



うりとピーマン



白菜



落ち葉

1983年(昭和58年) 81歳



のうぜんかずらの花 (庭には大きなゼンカズラがあった)



木の芽 (恩師武井武雄の葬儀の日取りのメモがある)



シマダイ (好んで聴いた楽曲名のメモがある)

作品索引

索引にはスケッチブックの作品は含まれていない

あ	鳥瓜 (水彩) 75	樹林 (B) 32	鳥毛立女屏風 (模写) 86	百日草 71	ゆ
赤いピーマン 41	かりんと鳥瓜 38	しょうじょう 52	な	びわ 60	夕 68
赤かぶ 58	カレンダー 72	しらはえ 47	なす 43	ふ	夕の海 64
秋の山 20	き	神宮参道 23	奈良公園 25	吹上菊 81	雪 (b) 33
朝の海 64	す	す	なんてんの実 37	ぶどう (A) 53	雪 (B) 28
あすかの段々畑 69	黄色いばら 70	隨身庭騎絵巻 (模写) 88	ぬ	ぶどう (B) 38	雪 (d) 33
あずまや 12	菊 80	せ	ぬけ 52	噴水塔 10	雪 (D) 29
油壺 69	北野天神縁起 (模写) 87	せ	ね	へ	雪 (E) 30
海女 77	キャベツ 40	世界一 48	ねむの花 60	へちまかぼちゃ 54	雪 (o) 33
アンスリューム 69	く	石門 62	年賀状 73	ほ	ゆず 42
アンスリューム (A) 55	くちなみ 63	ぜんめ 52	の	ポイントセチア 71	湯葉 38
い	くちなみの実 63	そ	のうぜんかずらの花 63	防砂林 27	よ
いか 36	け	そらまめ 45	た	ぼたん 60	寄り合う木のころ達 79
いしだい 59	渓流 27	た	は	堀端 9	夜 67
イスメネ 60	ケーブルカー 10	泰山木 56	ま	り	龍膽 82
う	こ	渓 22	廃園 (A) 23	丸干いわし 50	わ
牛のいる風景 62	紅白椿 39	玉葱となんばん 17	廃園 (B) 26	み	綿の花 76
内海風景 (A) 62	ゴールデンデリシャス	ち	廃屋 25	湖に行く道 19	わらび 51
海 (A) 65	35	知多の海 18	葉月物語絵巻 (模写) 87	妙法蓮華経 (模写) 88	
海 (B) 65	湖畔 19	蝶 68	羽豆岬 16	も	
うめもどき 63	コルチカム 71	鳥獣人物戯画 (模写) 89	花 63	桃とびわ 24	
お	ころがき 68	つ	花 (a) 66	桃畑 8	
落ち葉 70	さ	つつじ 44	花 (A) 31		
御岳高原 21	ざくろ 57	椿の咲く庭 13	花 (B) 67		
か	し	と	花 (C) 31		
果園 84	篠島風景 62		花惜しむ枝垂梅 79	や	
加賀の山 11	篠島風景 (A) 15	答志風景 20	ばら 46		
柿 49	篠島風景 (B) 16	豊浜風景 15	ばら (ex) 63	焼はぜ 61	
かぼちゃとピーマン 71	島 63	ドライブウェー 12	春野 74	野菜 14	
鴨猟 9	樹林 66	ドライフラワーと梶達 78	晩秋 18	山すその秋 11	
鳥瓜 38	樹林 (A) 32	鳥 63	ひ	山の参道 26	
			日傘 83		

略歴

岩田 覚太郎

- 1902年（明治35年）愛知県葉栗郡木曾川町に生まれる
1922年（大正11年）東京美術学校（現東京芸術大学美術学部）日本画科入学
1927年（昭和2年）同校同科卒業 引き続き研究科（大学院）に入学
松岡映丘に師事
1928年（昭和3年）第9回帝展に日本画出品
1929年（昭和4年）東京美術学校研究科修了
1931年（昭和6年）愛知県立半田高等女学校に図画科教諭として奉職
1935年（昭和10年）平塚運一の講習を受けて木版画を始める
1938年（昭和13年）日本版画協会展出品
1941年（昭和16年）日本版画協会会員
前川千帆の木版画講習を受ける
1948年（昭和23年）愛知県立半田高等学校美術科教諭
1951年（昭和26年）愛知県立半田半田商業高校教諭
1953年（昭和28年）水彩協会招待出品
1954年（昭和29年）水彩協会委員
1961年（昭和36年）版画五人展参加出品
1963年（昭和38年）半田商業高校退職
半田商業高校、半田工業高校、大府高校講師
1968年（昭和43年）第1回個展（名古屋潤）
1972年（昭和47年）名古屋芸術大学美術学部講師
1973年（昭和48年）第2回個展（名古屋潤）
1974年（昭和49年）朝日カルチャーセンター講師（版画）
1975年（昭和50年）愛知県美術館作品収蔵
1978年（昭和53年）すべて退職、退会
1980年（昭和55年）第3回個展（半田、オサダ）
1981年（昭和56年）第4回個展（名古屋、BOX）
1983年（昭和58年）第5回個展（豊田、松桜堂）
第6回個展（半田、花園公民館）
1986年（昭和61年）半田市作品収蔵
収蔵品展「絵巻と扇面と肖像画」（半田市立博物館）
1987年（昭和62年）半田文化賞を受ける
1989年（平成元年）岩田覚太郎展「版画六十年の回顧」（半田市立博物館）
1992年（平成4年）「岩田覚太郎所蔵 木版画展」（半田市立博物館）
1994年（平成6年）「木版画展 岩田覚太郎コレクション」（半田市立博物館）
1999年（平成11年）逝去



中学校時代



東京美術学校時代



高校教諭時代



晩年

編著者略歴（岩田 穆）

- 1946年 愛知県半田市に生まれる
1970年 名古屋大学大学院修了
1970年～1994年 電電公社・NTT研究所勤務
1994年～2009年 広島大学教授
2009年～ 同大名誉教授
e-mail: iwa-art@song.ocn.ne.jp
website: http://www.ai-1.jp

本書の購入は以下のサイト

http://www.ai-1.jp/kaku_g.html

岩田覚太郎の画集の購入



岩田 穆のWebsite



岩田覚太郎の画集

日本画から木版画へ、その生涯の思い

2021年3月1日 第1刷発行

編著者 岩田 穆

発行所 ブイツーソリューション

発行者 谷村勇輔

掲載の写真、文章、およびデザインの無断転載を禁じます。

©2021 Atsushi Iwata

ISBNコード価格はカバーに表示しております。

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。